

存在していたと思われる。

以上のように分析するなら、この地では古墳時代末から8世紀前半の集落構成は、竪穴住居2～4棟の集団が基本的な集落単位であったと思われる。また、8世紀前半に2つの集団が隣接していることを考えると、このような小規模な集落がいくつか集まって、村を構成していたのではないかと想像される。

ところで、森遺跡では各時期に卓越した竪穴住居跡がみられない。また、出土遺物にはS I 10の大和からの搬入土器やS I 21の横櫛など、わずかながら特殊な遺物があるが、総じて均質的である。これらのことから、本遺跡の各住居には優劣が認められず、それぞれの力関係は同等であったようにみうけられる。

ただし、上記の搬入土器、横櫛、畿内土器の模倣土器の所有に上下関係を求めることができるなら、6世紀末～7世紀初頭ではS I 10が、8世紀前半ではS I 14がやや優位であったということになる。

掘立柱建物

掘立柱建物は5棟検出された。いずれも遺物が出上していないため時期が確定できないが、古墳時代末以降の竪穴住居跡と無関係ではないと想像される。

建物の規模をみると、S B01が $13.5m^2$ 、S B02が $20.9m^2$ 、S B03が $17.3m^2$ 、S B04が $57m^2$ 、S B05が 2×3 間とするなら $27m^2$ で、床面積からするとS B01～03が小規模の建物であるのに対し、S B04、05は大規模な建物であることがわかる。これは柱穴の規模、深さからもうかがうことができる。これらの配置は、S B01～03が竪穴住居跡に隣接しているのに対し、S B04、05は竪穴住居跡と離れた位置に建てられている。

これらの規模、配置から考えると、S B04、05は一つの集落が所有する建物というより、複数の集落が共同管理していたような感じをうける。

一方、S B01～03は小規模な掘立柱建物で、各集落の倉庫的な性格であったと思われる。それぞれの位置関係をみると、S B01はS I 12、13に、S B02はS I 08～11、16に、S B03はS I 14、15、17～20に隣接しており、各小集落が1棟ずつ倉庫を所有していた可能性がうかがえる。

以上、今回の調査結果についてかなり想像を混じながら分析を試みた。今回の調査はいわば点の調査に過ぎず、集落論を展開するにはいささか無理があったかもしれない。将来、八神地区での調査が進めば上述した内容に批判が加えられ、さらに詳細な古代の集落の実態が明らかにされることと思われる。その上で、普遍的な要素や当地のみの特殊性が抽出できるであろう。

今回の調査では、縄文時代後期の土器をはじめ多くの良好な遺物がえられた。これらについても

検討を加えるべきであったが、紙幅の都合で割愛したことをご寛容いただきたい。

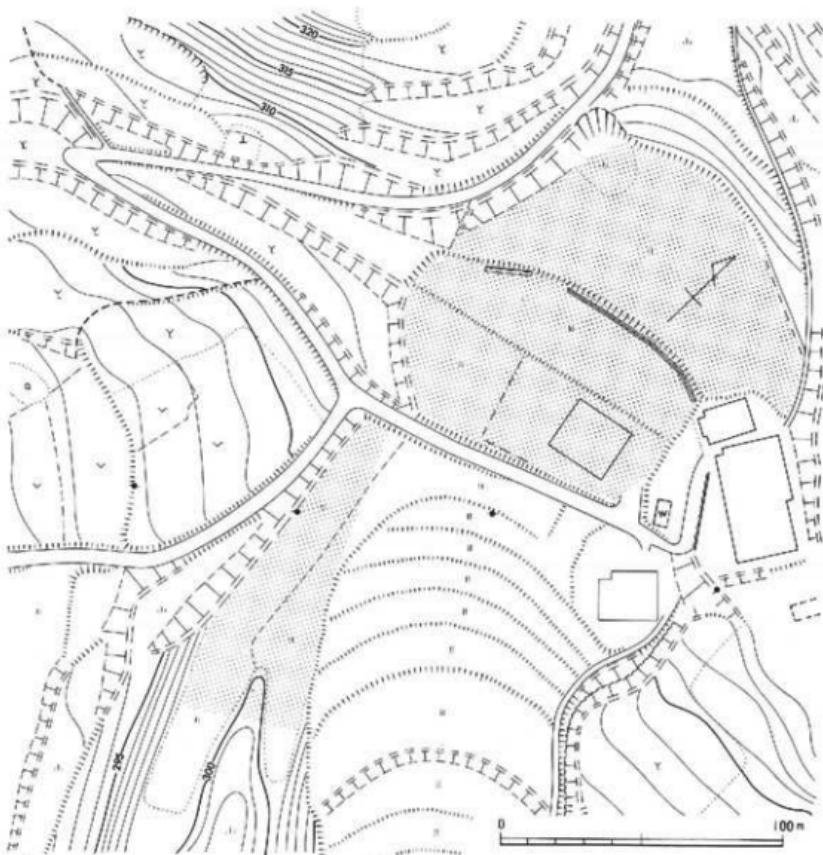
- 注 1) 須原町教育委員会『五明田遺跡』1991
2) 島根県教育委員会「重富遺跡」「中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ」1992
3) 島根県教育委員会「今佐山遺跡」「同上」1992
4) 北見町教育委員会「長グロ遺跡」「水田ノ上遺跡 長グロ遺跡 下止ノ田遺跡」1991
5) 川本町教育委員会「キバタケ遺跡発掘調査報告書」1992
6) 山口県教育委員会 財団法人山口県教育財団『國秀 平成3年度県営開場整備事業に伴う発掘調査報告書』1992
7) 島根県教育委員会「才の崎遺跡」「国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ」1989
8) 島根県教育委員会「高広遺跡発掘調査報告書」1984
9) 島根県教育委員会「勝負遺跡 一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」1992
10) 2と同じ
11) 広島県教育委員会「松ヶ迫遺跡群発掘調査報告書」1981
12) 埋蔵文化財研究会「古墳時代の龜を考える」1992
13) 広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」「山崩自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅳ)」1987

板屋 I 遺跡

1. 調査の概要

板屋1遺跡は飯石郡頓原町大字志津見631-1外に所在し、神戸川を西に望む斜面および小丘陵上に立地する。ここは調査前は水田であったが、開墾時に土をかなり入れたものらしく、厚いところでは地表面まで約4.5m土が堆積していた。

耕作土、堆積土を除去した後の地山の形状は、調査区中央付近が谷地形となっており、北側がもつ



第1図 板屋1遺跡 調査前の地形(1:1000) 網目は調査範囲

とも高く、南に向かうにしたがって次第に低くなる（第2図）。また、中央の谷は次第に大きくなり、東西に小丘陵が派生する。遺構の多くはこの小丘陵が派生するところにつくられている。調査区南部は、この小丘陵の一つで平坦に伸びて南端部で再び高まりができる。積石遺構はこの高まりの北の側に造られていた。南部の平坦面は、水田を開墾するために削平されたものと考えられ、ここでは遺構は確認されなかった。

土層の堆積状況は（第3図）、最上層の耕作土（1層）を除去すると、黒茶褐色土（2層）が約40cm堆積していた。この層には地山の小ブロックが縦状に入っている。2層の直下には暗褐色の固く締まった層（3層）があり、この層が古い水田の基盤層であると考えられた。この水田の元の所有者の話では、ここはもともと小さな区画の水田がいくつかあったが、何代か前に区画を広げて大きな水田とした。それ以後ここを「おおしんでん（大新田）」と呼ぶようになった、との言い伝えがあるという。水田区画を拡張したのがいつかはすでにわからなくなっているが、今回確認した第3層が拡張前の古い水田であろう。そしてその上の第2層は、水田拡張工事の際に埋められた土と考えられる。なお、調査区の北側はほぼ水平に削平されていたが、これも区画拡張工事による削平と考えられる。

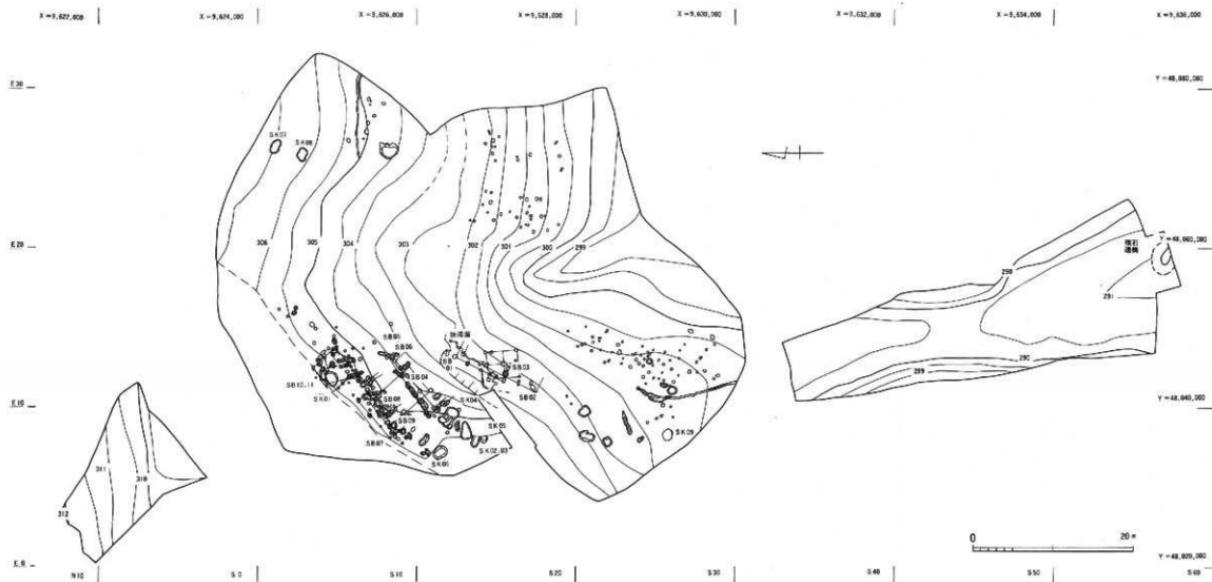
自然堆積土と考えられるのは、第4層以下である。これらは地山の地形に沿って堆積しており、北と西では薄く、南および中央の谷に向かうにしたがって厚くなる。この層の中には若干遺物が含まれ、その内容は縄文土器、弥生土器、陶磁器、鉄滓などである。陶磁器は大多数が18世紀より古く、遺構内出土の陶磁器の年代とほぼ対応する。

遺構は地表面で確認された。調査区西北部では斜面に柱穴群が重複して検出された。これらは掘立柱建物の柱穴にまちがいないと思われたが、複雑に重複しているため建物を組むのは困難であった。一応この部分で8棟の掘立柱建物を組んだが、柱穴の柱間がすべて均等であるものはなく、復元が正しいかどうかは自信がない。柱穴内からは陶磁器などが若干出土し、17世紀ころのものであることがわかる。

また、この周辺からは上坑が8個検出された。いずれも底面または壁面が火を受けており、石が投げ込まれた状態で詰まっているものがある。調査区の中央部でも上坑が1個検出されたが、この土坑からは縄文時代後期の土器の完形が出土しており他と性格が異なるものである。

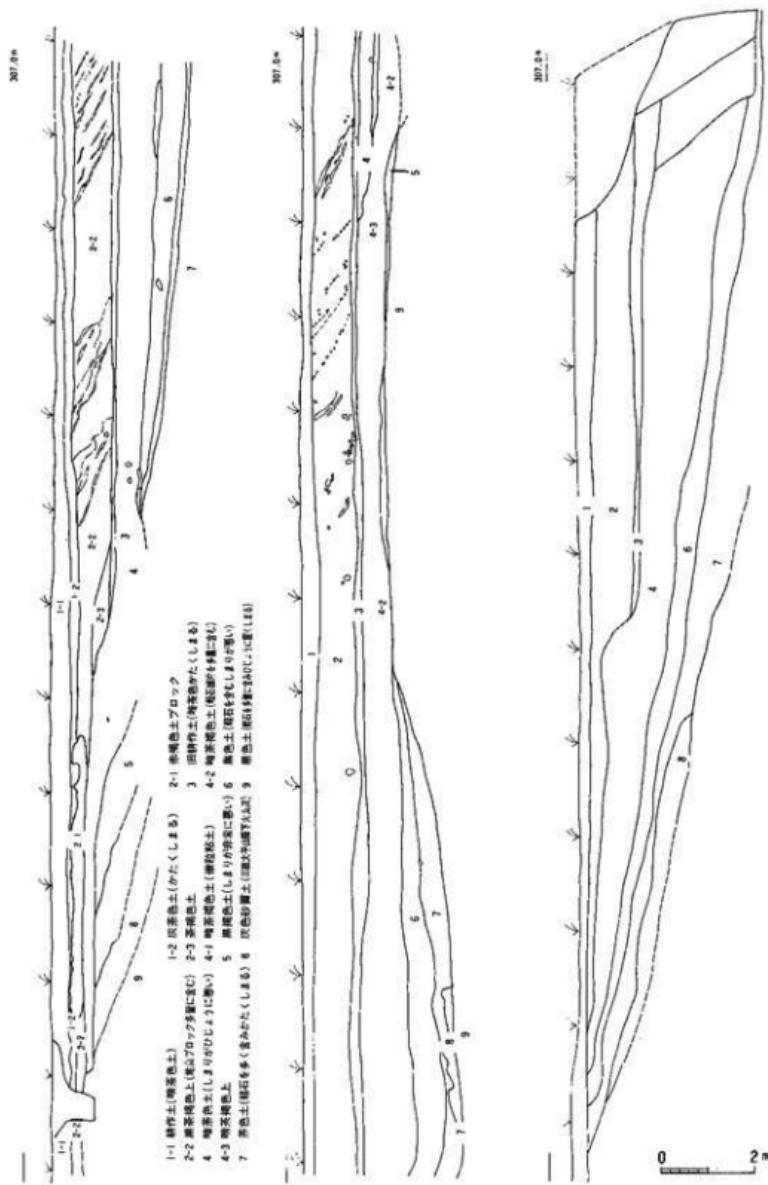
これらのやや南では鉄滓が集中していた。今回の発掘では製鉄跡は検出できなかったが、近くに製鉄遺構の存在が予想された。

鉄滓を取り除くと、その下から掘立柱建物3棟が検出された。この掘立柱建物は、前述のものとは違い加工段を造って平坦面を造成している。ここが平坦であったために、鉄滓が溜まつたものと考えられる。

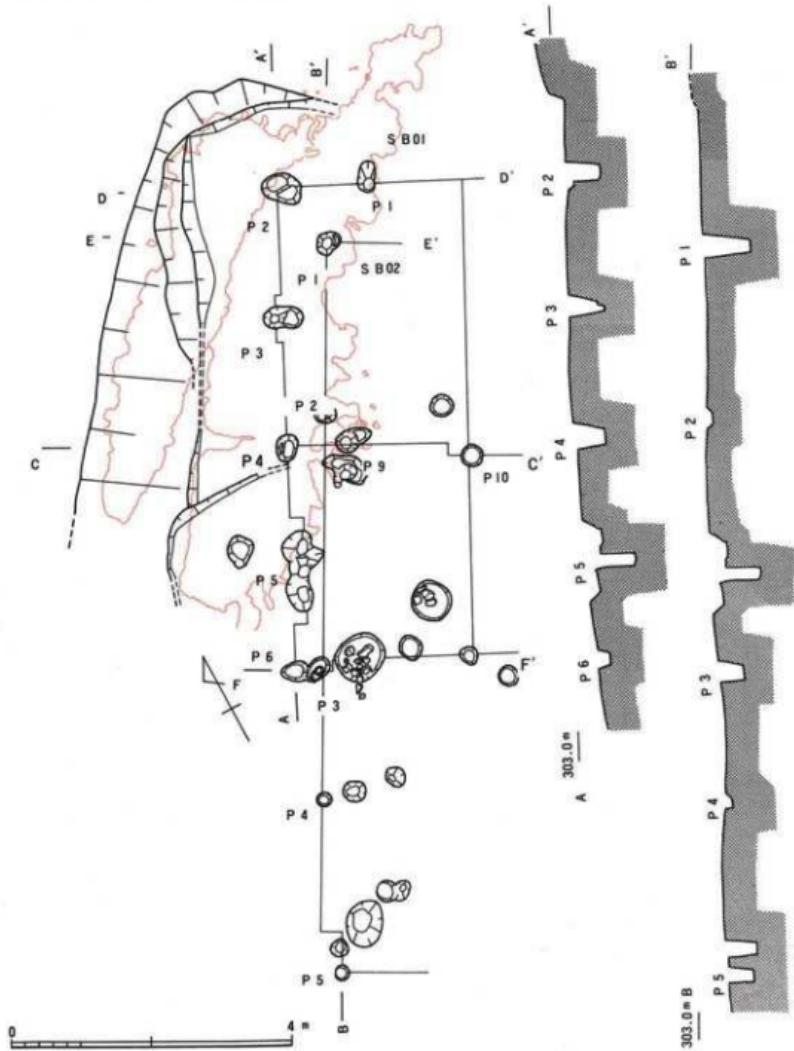


第3圖 板屜[遺跡] 遺構配置圖

第3図 板屋・通路 土壠堆積状況 (1 : 120)



調査区の南端では、通称「殿様墓」と呼ばれる積石遺構が検出された。ここは以前から石積の高まりがあることが知られ、宝篋印塔の残欠がみられた。調査の結果、上部は小さな石が多かったも



第4図 板壁I遺跡 SB01、02 (1:80) 赤は鉄滓溜

のの、下部は30~50cm大の石を長方形に組んだ造構であることがわかった。表面の宝篋印塔がこれにともなうかどうかは不明であるが、発掘によって検出された造構は宝篋印塔が建てられていてもおかしくないような構造であった。

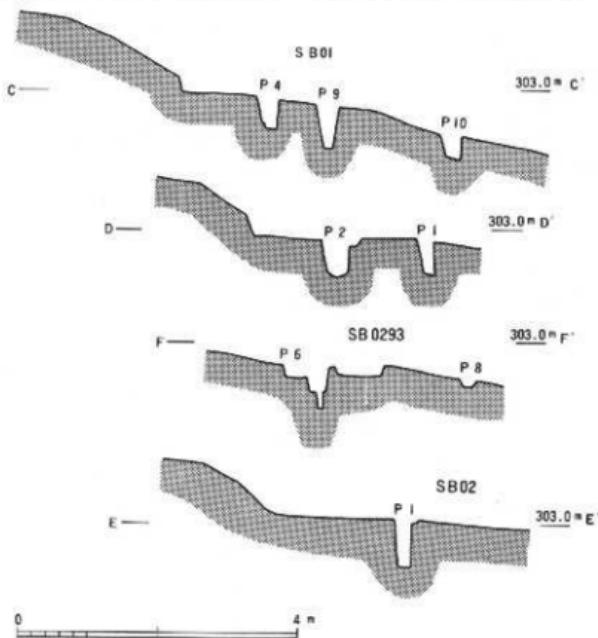
2. 検出遺構

(1) 掘立柱建物

S B01 (第4、5図 図版143) 山側(北側)を掘削して平坦面を造成して建てられた3間以上×3間の掘立柱建物である。この上部層には鉄滓が詰まった茶褐色土が堆積していた。これは、この住居跡埋没後の堆積であることから、両者に直接関係はないと思われる。S B02と平坦面を共有しているが、両者の前後関係は不明である。また、西南部分では別の加工段をもつS B03とも重複しているが、やはり前後関係は不明である。柱穴は山側のみで検出され、谷側の低い地点では検出されなかった。

確認された範囲では、
加工段の範囲は平坦面
が約5.6m × 3m、壁
上端部で南北6.2m、
東西2m、壁高は15cm
~104cmである。

この建物は梁行2.6
m以上、桁行7mを測
る。柱間は、桁は1.6
m~1.8mとほぼ等間
隔であるが、梁は0.9
m~2.9mとかなりば
らつきがある。P 4—
10、P 6—8はともに
柱間が2.6mと等間隔
であるので、P 1、9、
7などは補助的な柱穴



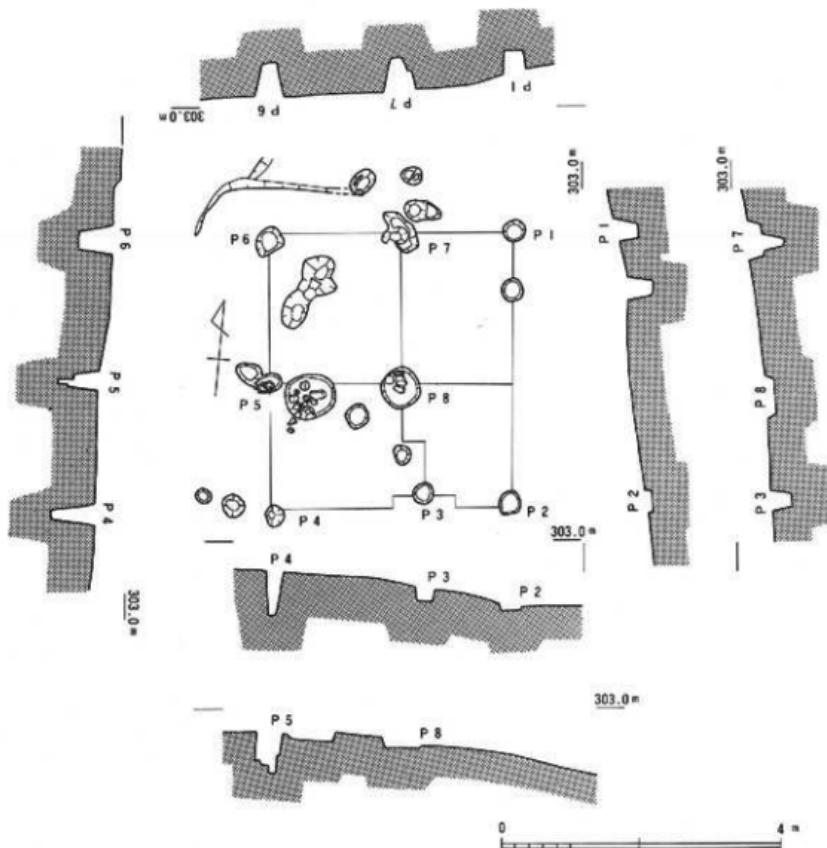
第5図 板屋I遺跡 S B01、02断面図 (1:80)

だったのかもしれない。

S B01からは遺物が全く出土していないため、時期は不明である。

S B02 (第4、5図) 栄行は不明であるが、桁行が5間の建物である。S B01の1mほど南に位置する。S B01との前後関係は不明であるが、共有している加工段の向きがS B01の方向により近いことから、あるいはS B02はS B01の立て替えかもしれない。

規模は桁行で10.4mを測り、柱間は両端のP 2—3、P 4—5が2.4m、その間が各1.8mである。



第6図 板壁I遺跡 S B03 (1:80)

これも遺物の出土がないため具体的な時期は不明である。

S B03 (第6図) S B01の南端に重複して位置する、2間×2間の総柱の建物である。規模は南北3.6m、東西3.9mと正方形に近い。柱間はP 2、P 3、P 4間が不揃いだが、その他は1.7～2.2mと比較的間隔がそろっている。柱穴は深いものが多いが、P 2とP 8は非常に浅い。

加工段の壁は非常に残りが悪く、東北隅から東壁にかけて長さ約2m、壁高10～30cmが検出されたにすぎない。

これも遺物の出土がないため具体的な時期は不明である。

S B04 (第7図 図版143) 斜面上に立地する2間×3間の建物で、西側でS B07、08、09、東側でS B05、06と複雑に重複する。

この建物は梁行4.1m、桁行6.6mを測る細長い建物であるが、P 2～8、P 3～7のそれぞれの中間に柱穴があり、一間分庇状にはりだしている。柱間は中間のP 2～3、P 7～8が3.3～3.6mと広く、他は1.4～2mである。

P 2、8～11付近では他のピットとの重複が著しいが、前後関係のわかるものは少なく、土層の観察によりS B04はS B09の後に作られたことがわかる程度である。またP 11、7は建物が組めない他のピットと重複している。これらはともに他のピットより新しい。

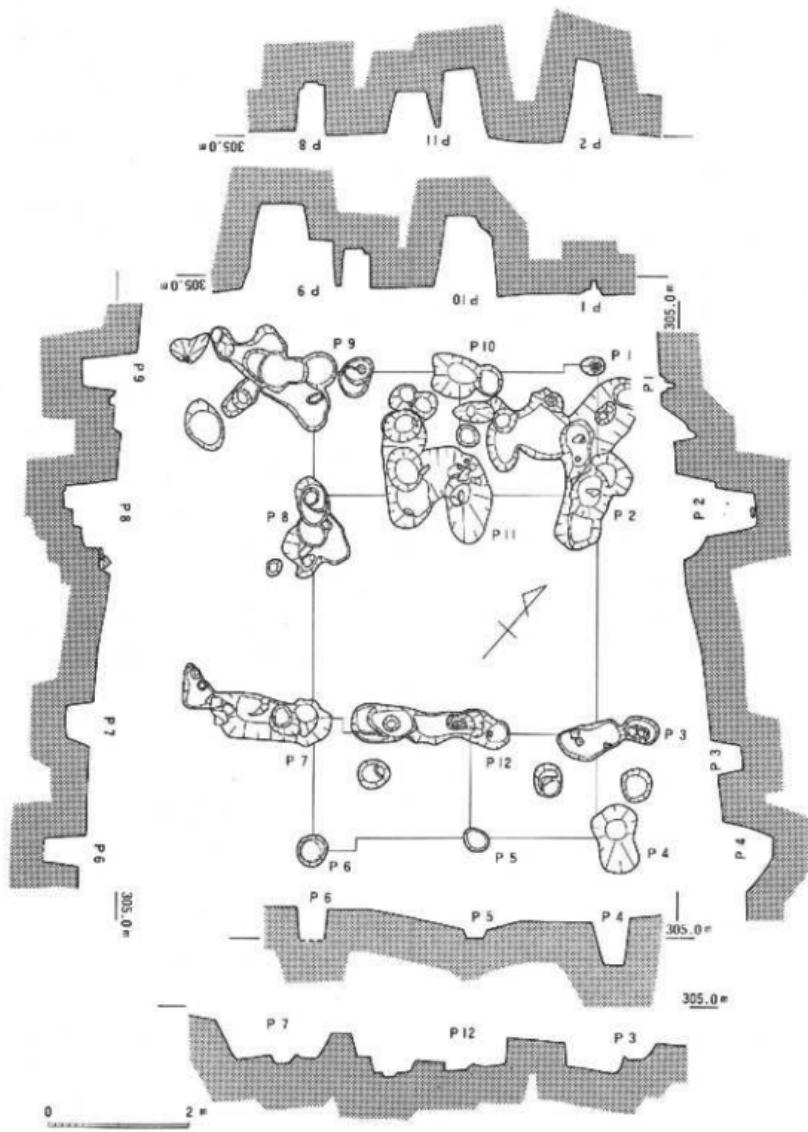
P 9からは青花碗が一点出土している(第17図3 図版164)。釉のかかりかたが比較的厚く、呉須は淡い色を呈す。外面は回転削りによる稜が明瞭に残る。口縁部外面の文様は、螺旋状文様と「～」状文様との繰り返しのようである。器形や釉のかかりかたが雷文帯をもつものと同様なことから、中国南方の産で16～17世紀頃のものといわれる。

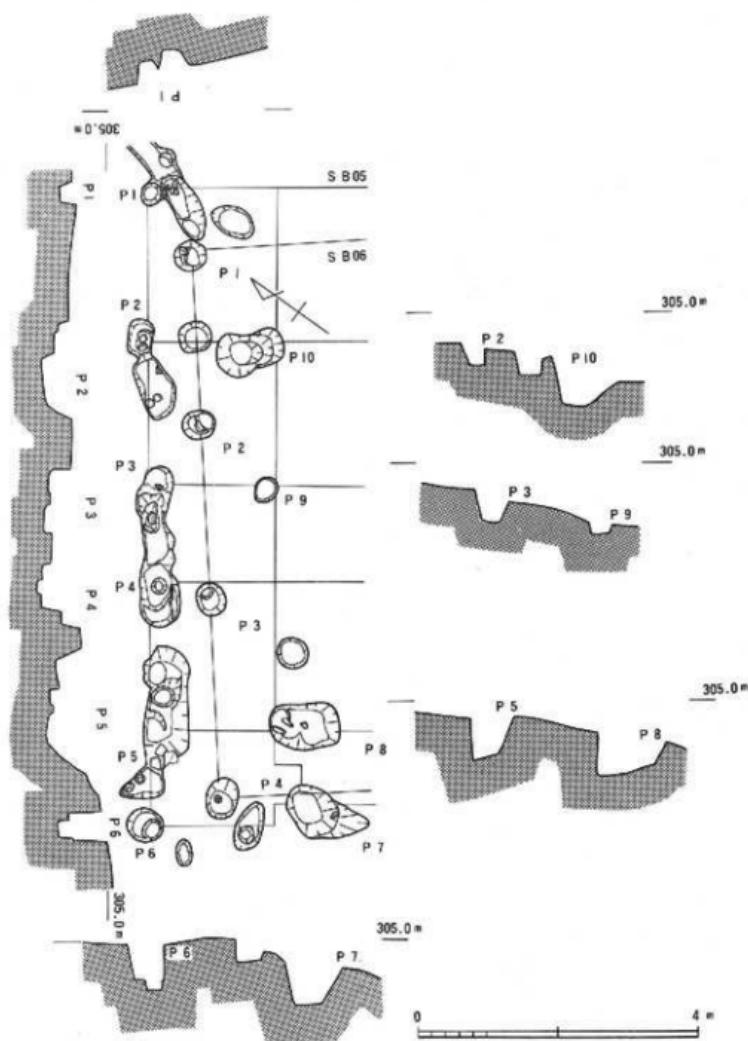
S B05 (第8図) S B04と重複して検出された、2間以上×4間の建物である。規模は梁行で2.6m以上、桁行で9mを測る。柱間はP 3～4、P 5～6が1.4m～1.5mと狭いが、概ね2.1～2.2mである。P 8、P 9は東柱と思われる。P 2～5がS B04のピットと重複しているが、前後関係は確認できなかった。

P 2、P 7、P 8からは染付、壺、陶器、土師器皿が出土した(第17図 図版162)。第17図1はP 8から出土した浅い皿形の陶器である。内外面に淡緑色の釉がかかっているが、外面下半は無釉である。産地、時期は不明である。

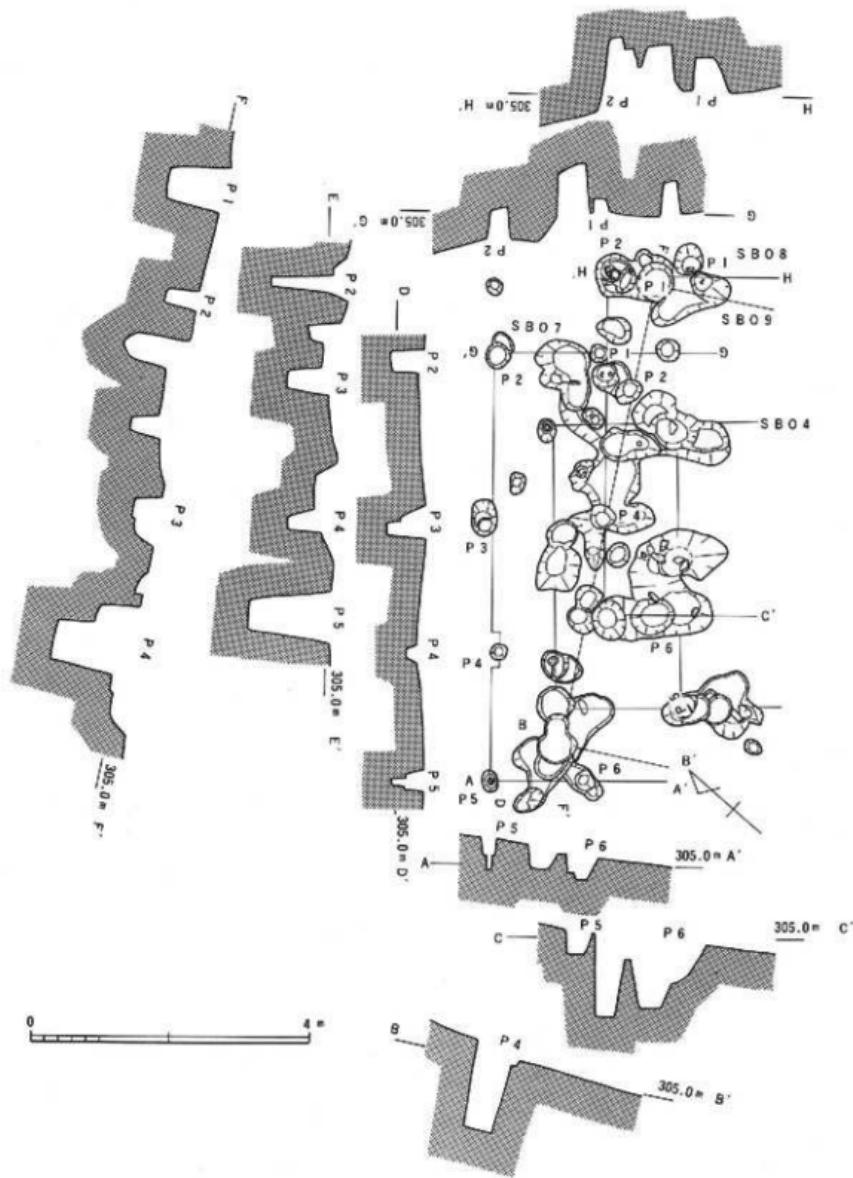
同図4、9は肥前系の染付である。4はP 7から、9はP 8から出土した。4は口縁部が開く器形、9は腰が張る深身の碗である。ともに呉須の色は淡い。4、9とも17世紀後半頃とされる。

同図6、7はP 8から出土した肥前系の壺で、同一個体と思われる。茶褐色を呈し、外面には薄く釉がかかっている。外面はなで調整、内面は同心円の当具痕をなで消している。江戸時代初期の頃と思われる。





第8図 板屋1遺跡 SB05、06 (1:80)



第9図 板壁遺跡 SB07~09 (1:80)

同図10は土師器皿である。口径9cm、器高3.2cm測る。口縁部と体部の境に屈曲して稜ができる、内面底部には時計回り方向の強いなでが一列する。内面は黒く変色していることから、灯明皿として使用されていたと思われる。このような上師器皿は富田川河床遺跡から多く出土しており、概ね16～17世紀のものとされる。

S B06（第8図） S B05とほぼ同一方向に重複する建物で、桁3間分（7.8m）を検出したが棟は検出できなかった。柱間はP 1-2、P 2-3が2.4m、P 3-4が3mである。

S B07（第9図） S B05、06の北側に3mに位置する2間以上×3間の建物で、S B05、06とほぼ同一方向を向く。桁行は6mを測る。柱間は梁のP 1-2、P 5-6が1.3m、桁のP 2-3が2.4mと広く、P 3-4、P 4-5が1.8mである。

S B07 P 1はS B08 P 3と重複するが、前後関係は不明である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

S B08（第9図） 2間以上×3間の建物で、S B07、09と重複しているが、方向はS B09により近い。桁行は5mを測る。柱間はP 3-4が2mとやや広いが、他は1～1.3mとほぼ等間隔である。

P 2がS B09 P 1と重複しており、土層の観察からS B09より古く建てられていたことを確認した。

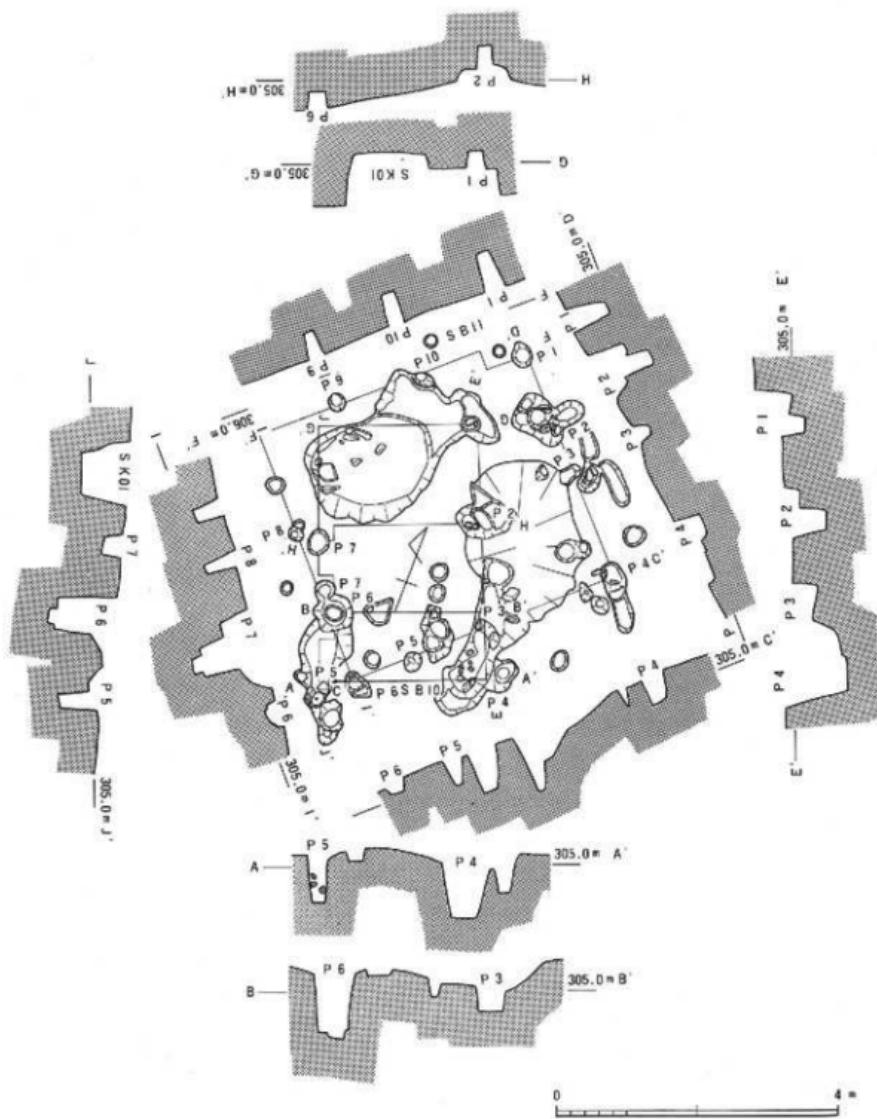
P 4からは第17図8（図版162）の肥前系の染付小壺が出土している。底径2.6cm、現存高2.8cmの小型である。外腹には9～11条の細花弁文と文字を交互に配している。文字は上部が欠けるため判読できないが、同一の文字のようである。呉須は濃青色を呈す。17世紀頃と思われる。

S B09（第9図） S B08とほぼ同一方向に重複している。梁では柱穴は検出できなかったが、桁は3間（6.7m）が確認された。柱間はそれぞれ2.3mで、等間隔である。P 1がS B08 P 2と重複しており、土層の観察からS B08（古）→S B09（新）であることがわかった。

遺物はP 3から美濃産の碗が出土した（第17図5 図版162）。口径12cm、底径5.3cm、器高6.9cmを測る。高台は付け高台で、高台接地面が無釉の他は全面に黄褐色の釉がかかっている。16世紀末頃とされる。

S B10（第10図） S B07～09の北側に位置しS B11と重複している。1間×3間の建物で、規模は梁行2.4m、桁行3.7mと小型である。柱間は梁であるP 4-5間が2.3mとやや広いが、桁ではそれぞれ1～1.4mと間隔は狭い。P 6がS B11 P 7と重複しているが、前後関係は確認できなかった。

P 6では土師器皿が、P 5では石鉢が出土している（第17図 図版161、163）。第17図11はP 6出土の土師器皿である口径9.2cmを測る。この土師器皿は富田川河床遺跡から出土した土師器皿と同



第10図 板屋・遺跡 SB10、11 (1:80)

様な器形であることから、江戸時代初頭と思われる。同図17は石鉢である。口径36cmを測り、厚さは2.9~3.8cmと厚い。口縁上端は平坦に面取りされ、内面は滑らかになるよう調整が施されている。石材は三瓶山の軽石である。

S B11（第10図） S B10と重複した、3間×3間の建物である。規模は4×3.7mを測り、平面形はほぼ方形である。柱間は1.3m前後の間隔が多いが、P 1~3のようにばらつきが大きいところもある。柱穴はほとんどが径20~30cmと小さいことや建物の規模そのものが小規模であることを考えると、この建物は付属的な性格であったのかもしれない。

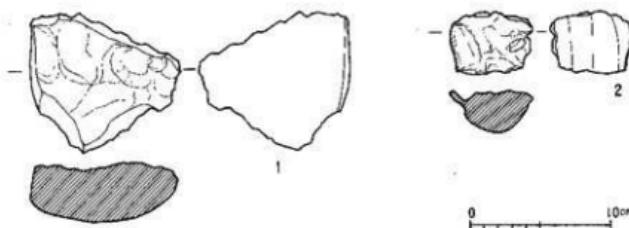
このほか獨立柱建物は組めないが、S B10 P 4の東に隣接するピットから第17図12（図版162）が出土している。底径8.8cmを測る底部で、赤褐色の素焼きの火鉢である。三角形の脚がつき、外側には印花文がある。外面の調整は縦方向にミガキが施される。これについては、産地、時期ともに不明である。また、同図16はS B10 P 4の南に接するピット出土の石臼で、石材は三瓶山の軽石である。磨面の溝は2本一単位のようである。

これらも概ね他の遺物とはほぼ同じ時期と考えたい。

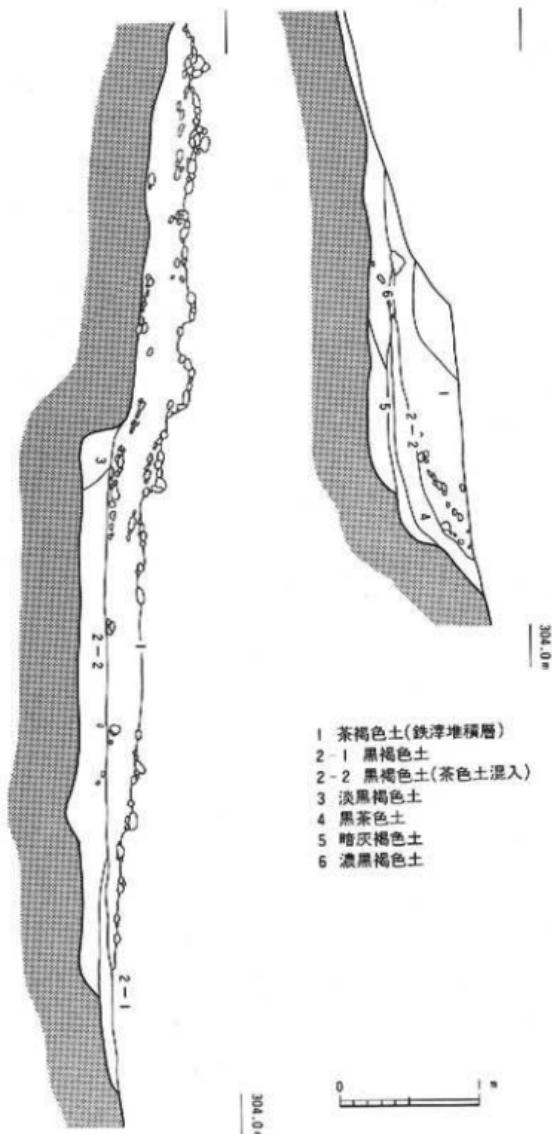
（2）鉄滓溜（第4～12図 図版144～145）

S B01加工段上に、約7×3.5mの範囲で鉄滓の堆積層が確認された。これは土層の観察ではS B01～03の埋土の上に堆積したもので、S B01～03とは関係ないと思われる。今回の調査では製鉄遺構は検出できなかったが、この斜面上方に存在したことはほぼまちがいないと思われる。

上層の観察によれば、鉄滓はS B01～03の埋土の上に堆積した黒褐色土土層中に混入していたが、下部と上部にとくに集中していた。この層は分層することができなかったが、鉄滓は二時期にわたって堆積したと考えられる。上層、下層とも、鉄滓の厚さは10cm前後と薄いことから、あまり大規模な操業ではなかったのかもしれない。



第11図 板屋I遺跡 鉄滓溜出土鉄滓（1:4）



第12図 板壁 | 遺跡 鉄滓溜土層堆積状況

出土した鉄滓は15cm以下の小さなものばかりで、いずれも製錬岸である。炉内滓(図版165)、流动滓(図版165)がほとんどで、炉壁などはわずかであった。鉄滓に付着した炉壁にはスサが混入されていない。鉄塊系遺物としては、含鉄炉床滓ブロックの周縁を打ち欠いた拳大ものがある(図版164)。

流動滓のうち固化した遺構がうかがえるのは第11図(図版164)に示した2点である。1は底面と側辺の一部に遺構壁面の形が残っており、土坑内に溜まった鉄滓塊が破碎されたものと思われる。2は流出溝底面の形がわかる鉄滓である。この鉄滓から復元すると、流出溝は幅4.5cm、深さ2.5cm程度であったと考えられる。

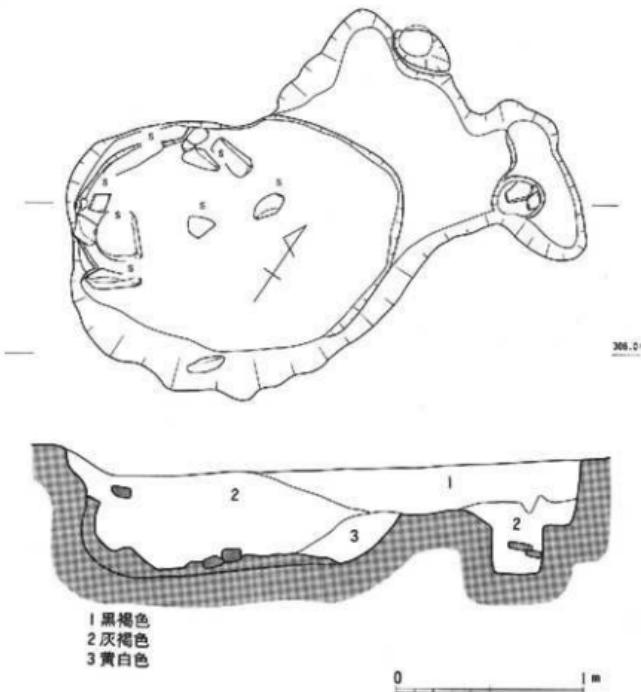
鉄滓以外には遺物は出土しなかったため、時期については不明である。

(3) 土 坑

S K01 (第13図 図版146) S B10、11に重なっている土坑で、平面形が橢円形を呈す。規模は長軸1.8m、短軸1.4m、深さ0.65mである。底面および南西壁は焼けている。南西壁面は強く湾曲していることから、本来は断面形が袋状であったと思われる。底面南西側には壁際に長さ約30cmの石が置かれていた。

遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

S K02 (第14図 図版147~148) S K03と並んでつくられている。平面形は橢円形で、検出された規模は長軸で1.6m、短軸で0.7mである。底面は凹面をなし、壁はいずれも湾曲が強い。中程



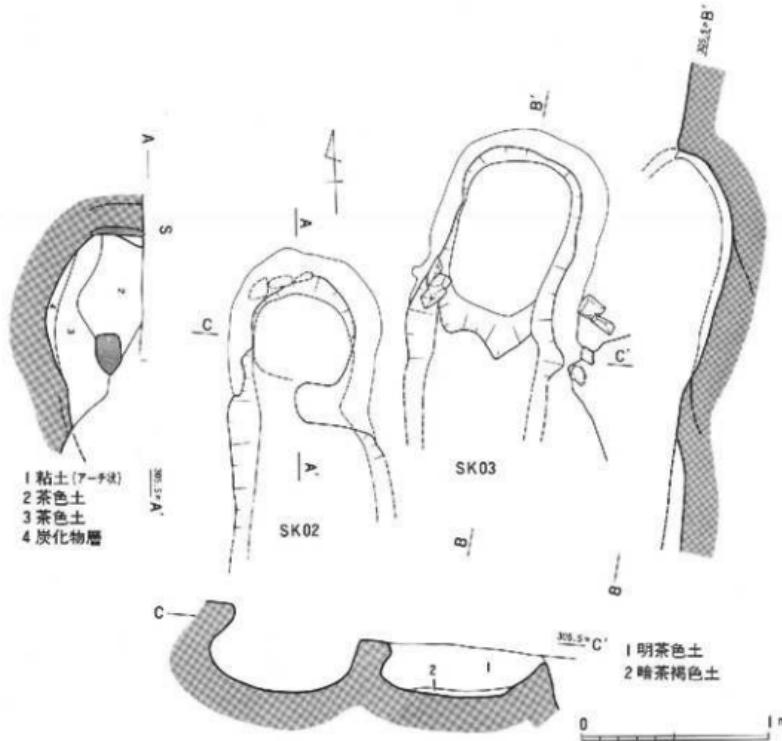
第13図 板屋I 遺跡 SK01 (1:30)

にはアーチ状に粘土が架けられ、南部側面はトンネル状に空洞となっていたことからここが焚き口となっていたと推定される。北部は天井は確認されなかったが、これが本来は天井があったものが陥没したのか、もともと天井部がなくてなにかを置く施設であったのかは不明である。

奥壁には板状の石が張り付けるように立てられていた。また焚き口東側にも石が立てられていた。壁面はいずれもよく焼けていたが、底面は焚き口付近だけが焼け、中央から奥には炭化物が5cmほど堆積していた。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

S K03 (第14図 図版147) S K02に隣接してつくられている。S K02に比べやや東向きである。平面形は梢円形で、検出できた規模は長軸で1.5m、短軸で0.9mである。S K02同様、底面は凹面をなし、壁はいずれも湾曲が強い。南端では焚き口両端に板状の石が立てられていた。壁面お



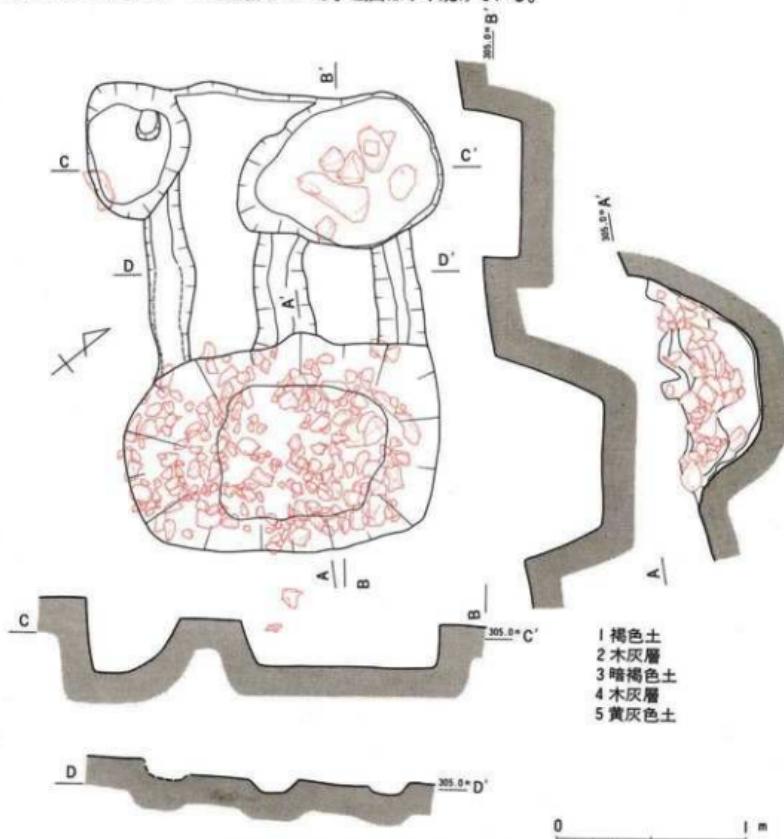
第14図 板屋「遺跡」SK02、03 (1:30)

より底面は非常によく焼けていた。

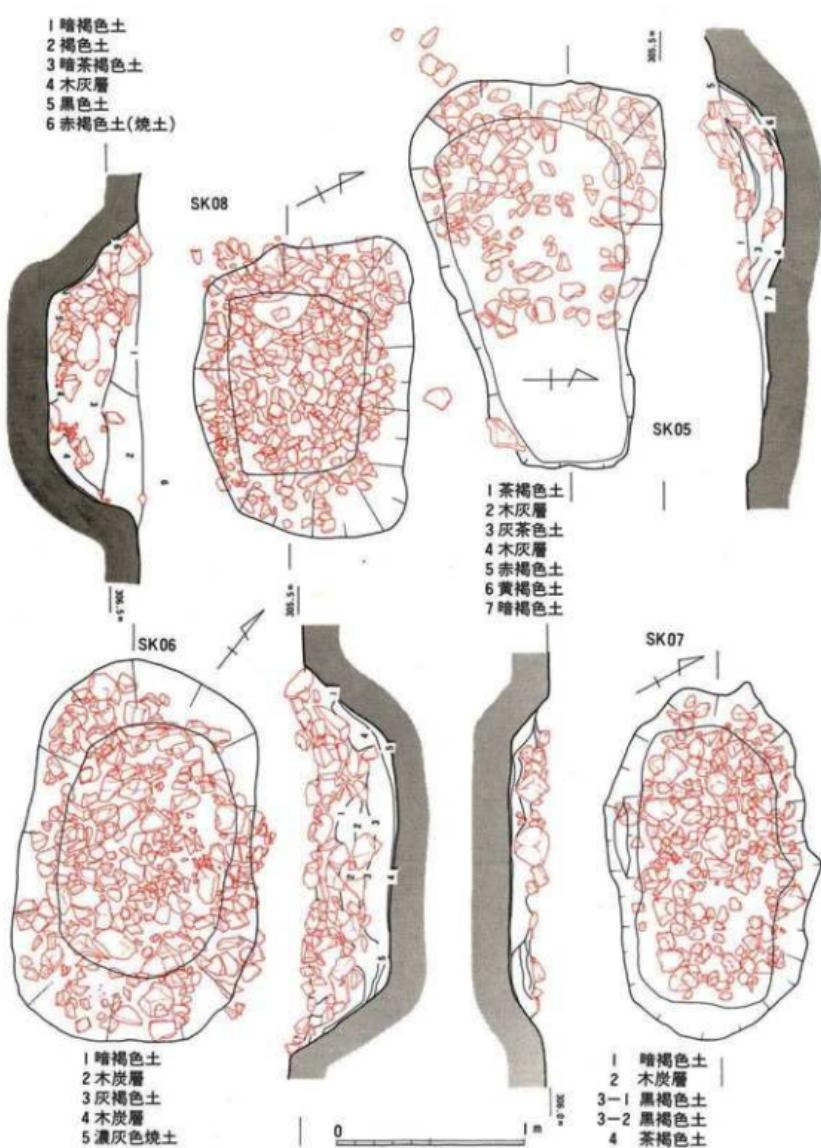
遺物が出土していないため、時期は不明である。

S K04 (第15図 図版149~150) 3個が溝状構造によって連結した土坑である。もっとも大きいS K04-1は平面形が 1.7×1.1 mの不整方形を呈し、深さ74cmを測る。土坑内には最下層に黄灰色土が堆積し、その上には大小の石が詰め込まれた状態で検出された。底面および壁面は焼けていた。

S K04-2は平面形が 75×55 cmの不整円形で、深さ40cmの土坑である。幅20cm、深さ約10cmの溝状構造によってS K04-1と連結している。底面はやや焼けている。



第15図 板屋I遺跡 S K04 (1:30)



第16図 板屋Ⅰ遺跡 SK05~08 (1:30)

S K04—3は平面形が $110 \times 80\text{cm}$ の不整橢円形で、深さ32cmの土坑である。幅25~30cm、深さ約7cmの溝状遺構2条によってS K04—1と連結している。底面から浮いた状態で石が検出された。この土坑は底面が焼けていないようであった。

S K04—2からはキセル（第17図15）が、S K04—3からは染付が二点出土した（同図13、14）。第17図15はキセル雁首で、上端径1.8cm、下端径0.7cm、現存高1.6cmを測る。銅製と思われる。同図13は底径2.4cmの小杯である。濃い呉須によって文様が描かれている。これは肥前系の染付で、17世紀初頭頃と思われる。同図14は底径5.8cmの腰の張る碗である。呉須の色は濃い。中国明代の青花である。

これらの遺物から、S K04は概ね17世紀頃の時期と思われる。

S K05（第16図 図版150~151） S K03の東側に隣接する。東南隅はS K03と重複し、土層の観察からS K05はS K03より新しいことが確認された。平面形は台形を呈し、規模は長軸で2.1m、短軸長辺で1.2m、短軸短辺で0.6mを測る。上部は掘削され壁は10cm程度しか残っていない。壁の立ち上がりは緩く、底面は北側半分がくぼんで凹面をなす。壁面と底面壁際は焼けているが、底面の焼土は最下層の炭化物層の上で形成されている。土坑内には最下部と上部付近に2層の炭化物層がレンズ状に堆積していた（第2、4層）。これらの炭化物を挟むように、大小の石が北側からほうり込まれた状態で出土した。

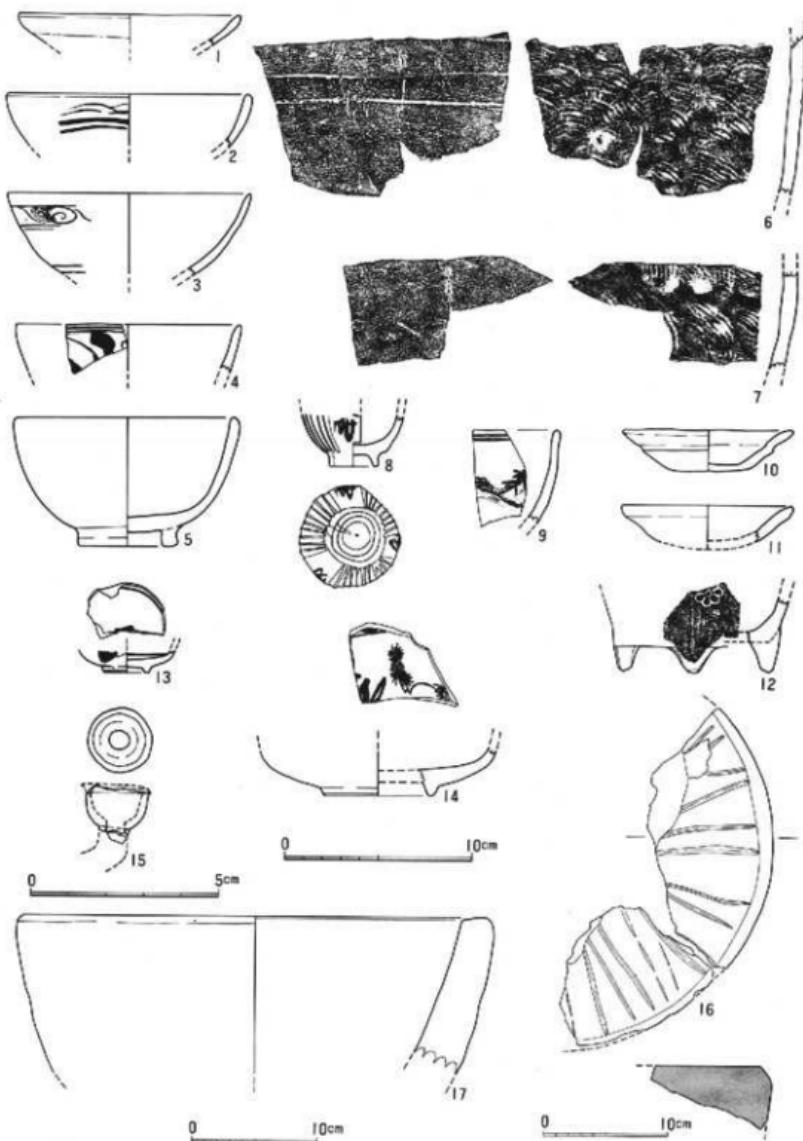
以上の事実から推定すると、この土坑では2回火が焚かれ、そのつど石がほうり込まれたと考えられる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

S K06（第16図 図版152~153） S K02~05の東北に位置する。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸で2m、短軸1.2mを測り、深さは約50cmである。壁の立ち上がりは緩く、底面はほぼ水平である。底面および壁面は部分的に焼けている。土坑内には最下部に炭化物が約15cmの厚さで堆積し（第4層）、この炭化物層の上に、大小の石が投げ込まれた状態でぎっしりと詰まっていた。この炭化物層（第4層）の上には灰褐色土（第3層）を挟んでさらにもう一層炭化物層（第2層）が堆積していることから、S K05と同様に2回火が焚かれていた可能性がある。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

S K07（第16図 図版154） S K02~05や掘立柱建物群の、谷を挟んで北東に位置する。平面形は不整橢円形を呈し、規模は長軸で1.85m、短軸1.05mを測る。深さは約25cmと浅いが、開墾時に上部が掘削された可能性もある。壁の立ち上がりは緩く、底面はほぼ水平である。底面および壁面は焼けていないが土坑内の埋土内には炭化物が含まれていた。坑底には一部炭化物が堆積し（第3層）ていた。これらの層の上に、大小の石が投げ込まれた状態で詰まっていた。



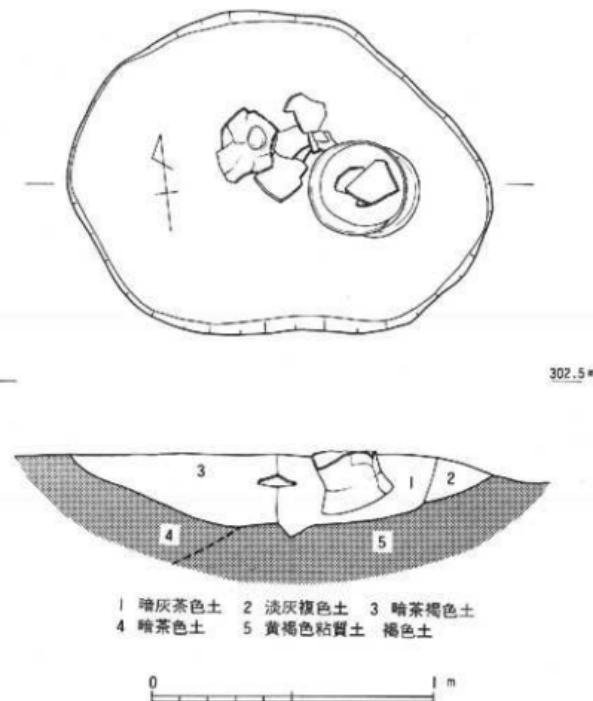
第17図 板屋 I 遺跡 遺構出土遺物 1~14 (1:3) 15 (1:1) 16 (2:9) 17 (1:6)

遺物が出土していないため、時期は不明である。

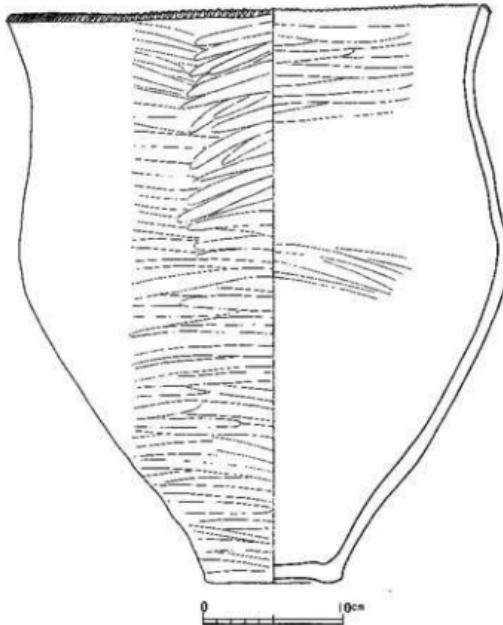
S K08 (第16図 図版155～156) S K07の南に位置する。平面形は方形を呈し、規模は長軸で1.6m、短軸1.15mを測り、深さは53cmである。底面はほぼ水平である。壁面は部分的に焼けている。土坑内には最下部に炭化物が約10cmの厚さで堆積し(第4層)、この炭化物層の上に、大小の石が西側から投げ込まれた状態でぎっしりと詰まっていた。この炭化物層(第4層)の上には第1～3層が堆積しているが、S K05やS K06とは違い、一回のみの燃焼であったと思われる。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

S K09 (第18図 図版156～157) S B01～03の南に位置する。平面形は不整橢円形で、規模は長軸で1.5m、短軸で1.15mを測る。深さは浅く、確認面からの深さは25cmであった。底面は凹面をなし、壁との境は不明瞭である。坑内には縄文土器(無文深鉢)が一個体出土した。この土器は、



第18図 板屋T遺跡 S K09 (1:20)



第19図 板屋I遺跡 SK09出土土器 (1:4)

上半部が倒立状態で東側に、下半部が正立状態で中央に置かれていた。

出土した縄文土器（第19図 図版166）は口径34.3cm、底径9.8cm、器高41.2cmの大型の上器で、ほぼ完形である。胴部は張り気味で、頸部はくびれて外反する口縁部をもつ。底部は平底だが、口径、器高にくらべ小型で不安定な感じをうける。口唇部は平坦であつて、口唇部に対して直交して大きな刻み目文が施されている。外面は巻き貝条痕、内面は巻き貝条痕などによる調整である。

この縄文土器は後期の土

器であるが、詳細な時期は不明である。同様な器形、文様の上器は岡山県福田貝塚で多く出土していることから、後期でも比較的古いかもしれない。

(4) 積石遺構 (第20~23図 図版157~161)

調査区の南端に位置する。ここは以前から通称「娘様墓」と呼ばれ、調査前の地表観察でも石の集積が認められ小マウンド状を呈していた。積石の範囲は、発掘前では2×2.5mを測った。上部の小石を除去した段階で、30~70cmの大きな石による石組みが2.2×1.8mの範囲で検出された。第21図はその時点での実測図である。

この積石遺構は、丘陵の高まりの北端を掘削して加工段を作り、その上に石を長方形に組んで石室状をしていた。加工段は3.1×2.5mの範囲で確認されたが、周囲の水田の開墾などによって改変されている可能性もある。現在の丘陵地表面との比高差は南端で約0.8mである。

石組の内法は1.5×0.75mを測る。坑底には、北および南に1個、西壁に3個、東壁に6個の石

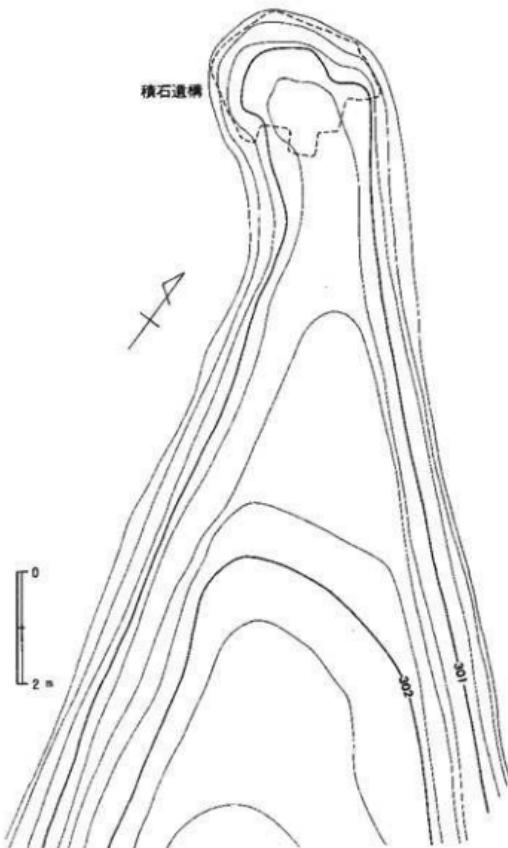
を置いて基底部とし、もっとも残りがよい西壁ではその上に3段から4段に石を積んで壁としていた。壁は西壁ではほぼ垂直に積まれていたが、その他の壁は基底部より上部の石は内側にせりだすようになっていた。これが三方の壁が倒れた状態であるのか、本来このような構築方法であったのかは不明である。

石組内は土が詰まっていたが、ここが丘陵頂部に近いことから自然に土が流入したとは考えにくく、石組を構築した直後にここを埋めたものと思われた。

出土遺物は、第23図(図版167)に示した宝篋印塔のはかは近世の陶器片、鉄製容器小片のみである。宝篋印塔はいずれも三瓶山の軽石を材料として作られており、小片の状態で出土した。第23図1は相輪残欠で、九輪から伏鉢にかけての部分である。残存長26.4cm、伏鉢下端から九輪上端までの長さ19.2cm、九輪上端径10.5cm、伏鉢径11.7cmである。九輪は4段残り、縦刻によって表現されている。また、蓮花は蓮弁の表現が消失しなにも描かれていらない。伏鉢の下には径8cm、長さ6.5cmのはぞがつけられている。

第23図2は塔身である。小片となつて積石上面に散在していた。15.3×15.4×15.3cmのほぼ立方体である。上面には10.8×11.8cm、深さ4cmの納入孔が穿たれている。納入孔の断面形は台形で、下面是4.5×5.5cmの不整方形である。外面にはなにも表現されていない。

このほか、図示しなかったが別個体と考えられる伏鉢の細片が1個出土している。2の伏鉢と同様

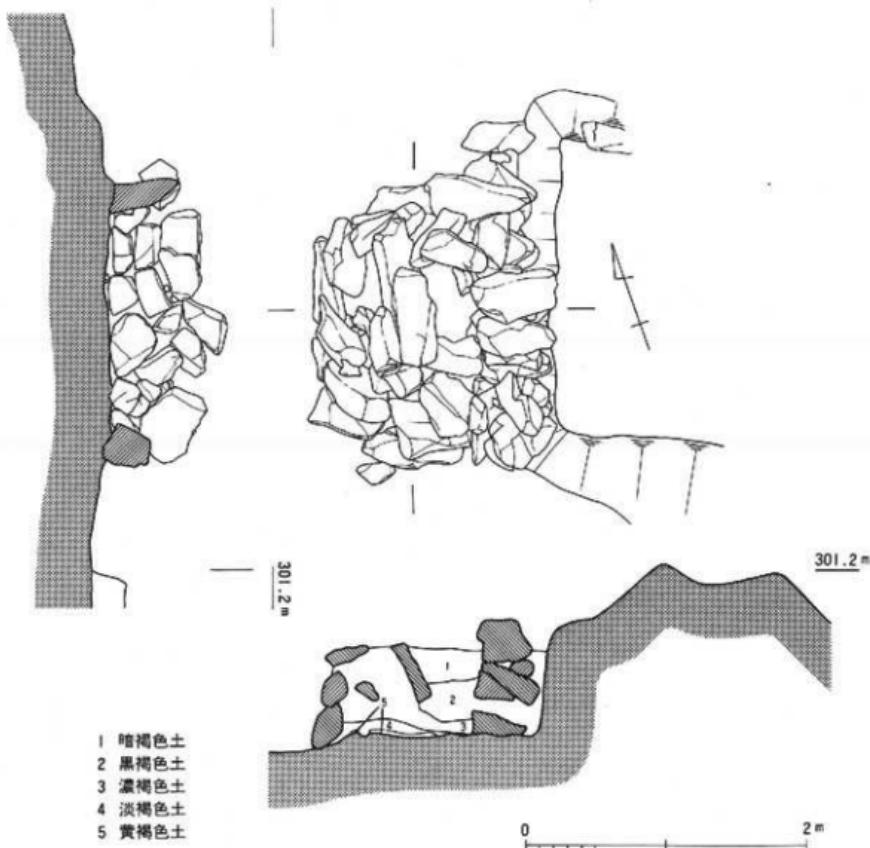


第20図 板屋1遺跡 積石遺構地形測量図 (1:100)

の形態である。

これらの宝鏡印塔は、九輪が線刻で表現されていること、誂花に蓮弁が消失していること、塔身に梵字などが描かれていないことなどから、概ね中世末から近世初頭のものと思われる。

これらの遺物はいずれも地表面から動いた状態で出土したことから、この遺構の時期を決定する資料とはいがたい。また、ここが現在でも信仰の対象となっていることから、陶器の時期がこの遺構の構築時期とはいえない。宝鏡印塔はここが「殿様墓」と言い伝えられることから、本来ここ

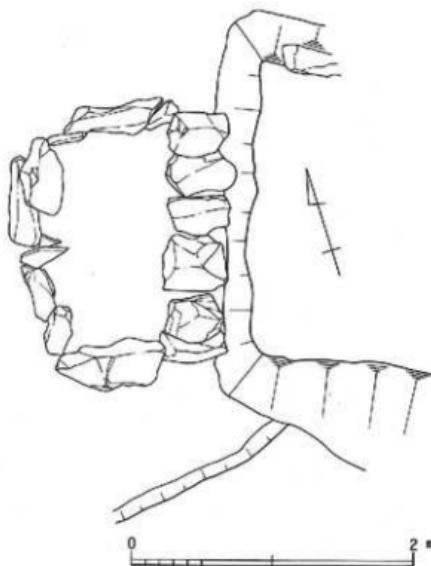


第21図 板屋 | 遺跡 積石遺構 (1 : 40)

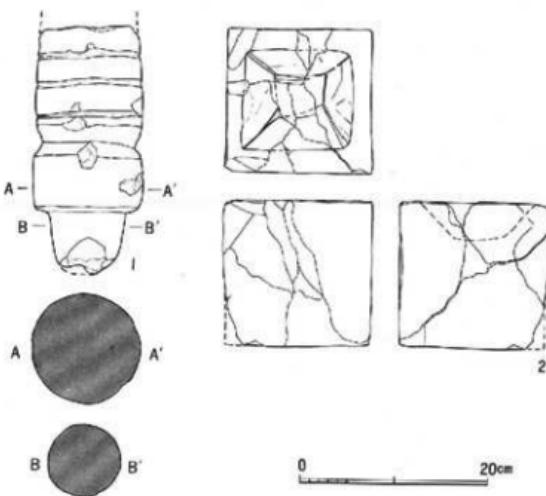
に建てられていた可能性があるが、宝鏡印塔は後世に寄せ集めされることも多く、これが当遺構の時期を示す確証はない。図示しなかった別個体の伏鉢細片が出土したこと、近隣に建てられていた宝鏡印塔が集められたことを示すと思われる。ただ、石組遺構が宝鏡印塔を有していても不思議ではない構造のものであることから、これらが2塔並立していたか、もしくはこのどちらかの宝鏡印塔が本来ここに建てられていたともあながち否定できない。

遺構の形状を見る限りでは、この遺構の性格は墓坑である可能性は高いと思われる。この遺構は、坑を掘らずに加工段を作つて石組をしているのが特徴である。

周囲の水田開墾等によつて大きく掘削されていることから、当時は土坑を掘っていたことも考えられるが、調査時には土坑が掘られていたのか加工段のままであったのかを判断することはできなかつた。



第22図 板屋I遺跡 積石遺構基底部 (1:40)



第23図 板屋I遺跡 積石遺構出土宝鏡印塔 (1:6)

(5) 包含層出土の遺物

包含層からは縄文土器、弥生土器、中近世陶磁器、石器が出土している（第24、25図 図版168、169）。縄文土器は後期、晚期の小片が出土した。第24図1～4は磨消縄文帯をもつ土器である。1、3、4が渦巻き文、2が「」字文の部分と思われる。いずれも縄文はR Lである。これらは福田K II式と考えられる。

同図5は半精製土器で、口縁部に沿う沈線に直交する3本の沈線が垂下する。口唇部には大きな刻み目が施される。布勢式または彦崎K 1式と思われる。

同図6は粗製無文土器である。外面には縦方向に深い巻き貝条痕が施される。後期と思われるが、SK09の土器より新しい感じをうける。

同図7は2本の沈線と小さな擬縄文が施される土器で、彦崎K 2式と思われる。

同図11は晩期前半の深鉢である。口縁部が短く外反し、口唇部は厚い。

同図13は晩期前半の長頸浅鉢である。口唇部には平坦面ができる。

同図8～10、14は晩期の突帯文土器である。8は口縁部上端が内側に屈曲するように内傾するやや特異な土器である。刻み目は突帯上のみにV字刻み目が施される。14は口唇部、突帯上ともに刻み目が施されない。9、10は胴部突帯である。10は胴部がやや屈曲するが、11は胴の張りがみられない。刻み目はとともにV字である。

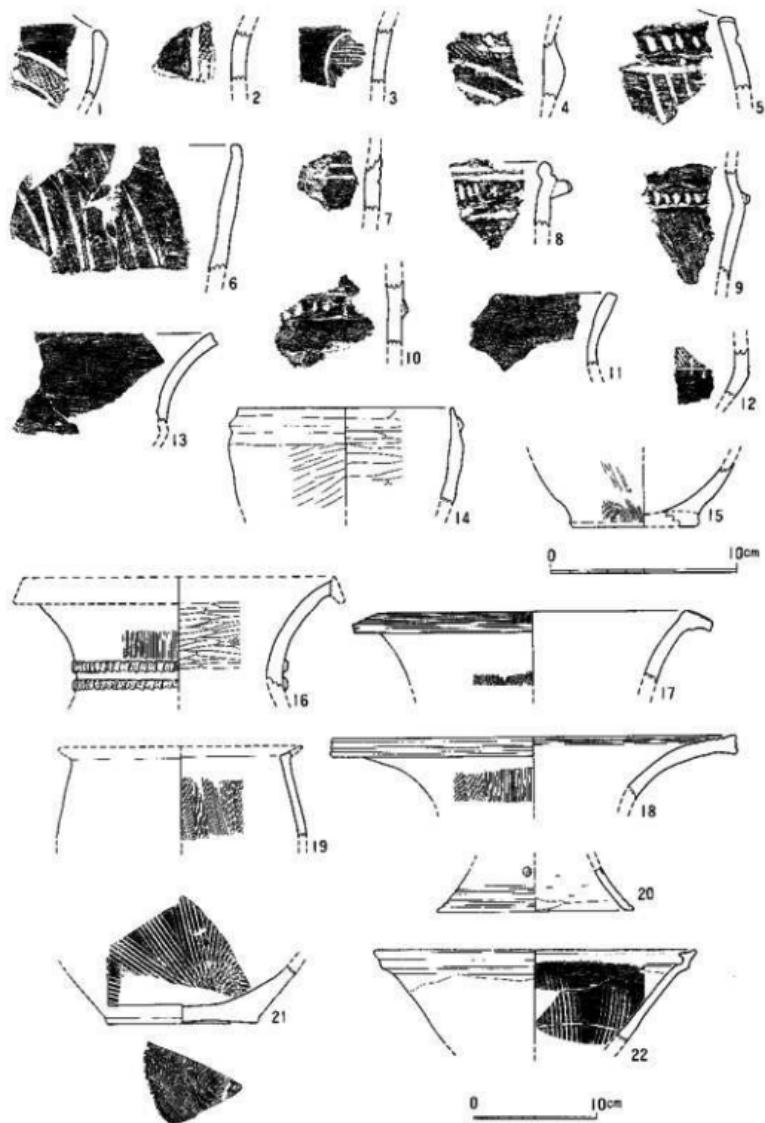
第24図16～20は弥生中期の土器である。16～18は臺で口縁部が大きく朝顔形に開き、口縁端部が拡張するものである。17、18はともに凹線が施され、17にはさらに重下文（浮文）がつけられている。20は高环脚部である。凹線が施され、竹管状工具による刺突文がある。これらはいずれも中期中葉から後葉にかけての土器である。19は中期中葉の甕である。無文で細い刷毛目調整が施される。

同図21、22は肥前系の摺鉢で、同一個体と思われる。口縁部は屈曲し口唇部は平坦である。内面には7～9本一単位の摺り目がある。軸は内外面とも口縁部のみにかけられ、胴部、底部は無軸である。底部外面には回転糸切り痕が残る。17世紀頃のものと思われる。

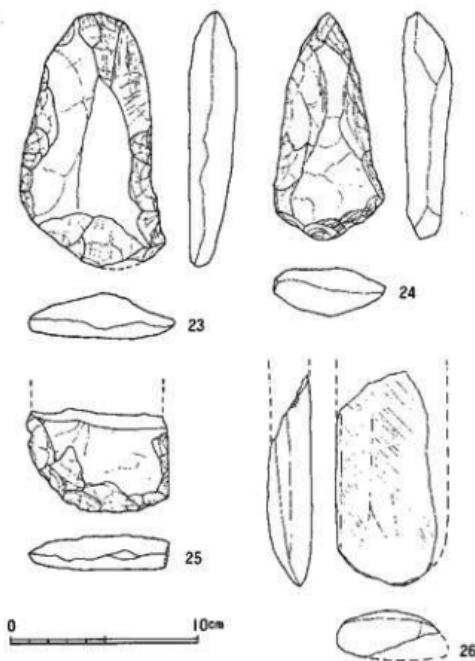
第25図23～25は打製石斧である。いずれも中央に大きく自然面を残す。23は全面非常に摩滅しており、両面に使用痕がよく残る。

同図26は磨製石斧である。全面ていねいな研磨が施され、研磨痕が観察できる。

このほか、包含層からは陶磁器、鉄滓などが出土している。陶磁器はほとんどが肥前系で、18世紀以前のものが多い。また、鉄滓のなかには炉壁のほか輪羽口片、鐵塊系遺物がみられる（図版170）。炉壁のなかにはスサ入りの炉壁がある。



第24図 板屋Ⅰ 造跡 造構に伴わない遺物 1~15 (1:3) 16~22 (2:9)



第25図 板屋Ⅰ遺跡 遺構に伴わない遺物 (1:3)

板屋Ⅰ遺跡 包含層出土遺物一覧表 (Ⅲは板屋Ⅲ遺跡出土遺物) ()は現存値

器種	攝団番号	因版番号	出土地点	法量(cm) 口径 器高 底径	形態	文様	手法	備考
繩文深鉢	24-1					磨消繩文 RL 渦巻文	ミガキ	福田KⅡ
繩文	24-2					磨消繩文 RL	ナデ	同上
繩文	24-3					磨消繩文 RL 渦巻文	ミガキ	同上
繩文	24-4					磨消繩文 RL	ナデ	同上
繩文	24-5					口唇大きな刻目 太い沈線(巻貝)	ナデ 卷貝条痕 布勢～彦崎K1式?	
楕円深鉢	24-6						深い縱方向の卷貝条痕 ナデ	後期
楕円	24-7	Ⅲ				沈線 楕円文	ナデ	彦崎K2式
繩文深鉢	24-8				口縁屈曲	突帯文 V字刻目	口縁下に巻貝による沈線状の調整痕 ケズリ	晩期
繩文深鉢	24-9					突帯文 V字刻目	ナデ	晩期 脚部突帯

器種	揮図番号	閑版番号	出土地点	法口径	高さ(cm)	底径	形態	文様	手法	備考
繩文深鉢	24-10		III					突帯文 V字刻目	ナデ	晩期 制部突帯
繩文深鉢	24-11						口縁短く外反		巻貝条痕+ナデ	晩期
繩文浅鉢?	24-12						胸部屈曲	縦横の沈線による区画内に斜格子文	ミガキ	晩期?
繩文浅鉢	24-13						長頸 口唇平坦		ミガキ ケズリ	晩期
繩文深鉢	24-14			11.6				低い突帯文	巻貝条痕+ナデ	晩期
繩文?	24-15		III		8				ハケ目? ミガキ	晩期?
弥生壺	24-16						口縁大きく開く	刻目突帯文	ミガキ ハケ目	中期
弥生壺	24-17						口縁大きく開く	彌凹線7条垂下浮文	ハケ目 ミガキ	中期
弥生壺	24-18		III	25			口縁大きく開く	凹線内面に5条外面に2条	ヨコナデ ハケ目	中期
弥生壺	24-19						口縁短く屈曲		内面ハケ目	中期
弥生高环	24-20				16			凹線4条 竹管状側突文	ヨコナデ ケズリ	中期
肥前系摺鉢	24-21				12			内面に摺目(一單位8条前後)	回転糸切	22と同一個体か
肥前系摺鉢	24-22			26.4			口縁屈曲	内面に摺目 口縁部のみ施釉		
打製石斧	25-23			(長) (幅) (厚)					中央に大きな自然面	使用痕顯著
打製石斧	25-24			13.6 7.7 2.4					中央に大きな自然面	一部使用痕
打製石斧	25-25		III	(長) (幅) (厚)					中央、側縁に自然面	一面に使用痕
磨製石斧	25-26			12.1 6 2.6						
打製石斧	25-25			5.5 7.6 2						
磨製石斧	25-26			(長) (幅) (厚)					全面ていねいに研磨	
				11.3 5.4 2.5						

3. 小 結

今回検出できた遺構は、掘立柱建物11棟、土坑9、鉄滓溜1であった。

掘立柱建物については検出された位置から、SB01~03とSB04~11の2群に分けることができる。

SB01~03は山側の斜面を削削し整地をした上に建物を建てられている。このように加工段を作つてその上に掘立柱建物を作る例は、奈良時代以降多くみられる。SB01と02が一つの加工段を共有しているが、これは建て替えによるもので、基本的にはSB01~03は一つの加工段に1棟が建てら

れていたと思われる。遺物が出土していないため、これらの時期については不明であるが、加工段一つにつき1棟が建てられるという状況は比較的古い時期であるかもしれない。

S B04～11は傾斜面を整地をしないまままで建てられている。これらは柱穴が重複しているものがあり、前後関係が捉えられるものがある。これを簡単にまとめると、S B08→09→04の前後関係が認められる。これらは柱穴内から16世紀末～17世紀にかけての陶磁器が出土していることから、いずれも概ね江戸時代初頭の建物と考えてよかろう。

建物の方向と位置からいえば、S B04とS B05～09、S B10、11の3つに分類できる。このうちS B04はS B08、09より新しいことが確認されているのでおくとして、S B05～09はS B05～06とS B07～09が約5mの距離をおいて2棟から3棟が重複している。これらの2つの建物群はいずれも同一方向に建てられていることから、2棟が併存していたと考えられる。重複関係から考えると、ここでは2棟が少なくとも2時期にわたって平行に建てられていたようである。

S B10、11については、ピットが重複しているものの、前後関係は不明で、S B04～09との時期的な関係も不明である。時期的には、S B10出土の土器器皿が他の建物同様近世初頭と考えられるので、S B04～09とあまり変わらない時期と思われる。とすれば、ここではある時期には3棟が建てられていたかもしれない。

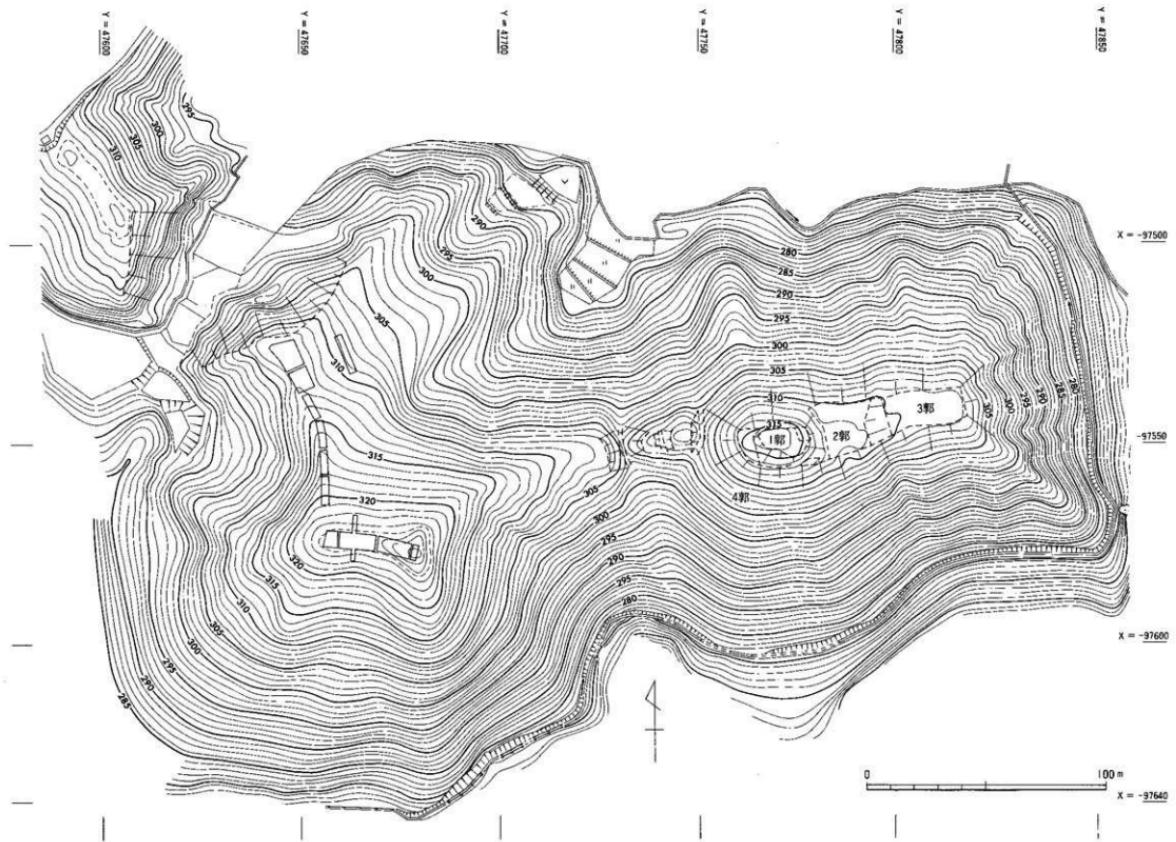
土坑は9個検出されたが、SK09が縄文時代、SK04が17世紀頃とわかる以外は時期が不明である。しかし、土層の堆積状況がSK04とあまりかわらないことからSK09以外は17世紀頃と想像される。SK01、04～08は、SK04の形態が特異であるが、底面または側壁が焼けていること、内部に石が詰め込まれていたこと、など共通点が多い。これらは、炭化物の層が2層あるものが多いことから、複数回内部で火が焚かれたものと考えられる。また、これらの土坑には石が多く詰められていたが、これは焼成物の完全燃焼を目的としていたためと思われる。想像を逞しくすれば、ここで家庭用の消し炭を作っていたのではなかろうか。

SK02、03は横方向に焚き口があることから、上記の土坑と性格が違うように思われる。調査当初製鉄関係の遺跡とも考えたが、周囲に鉄滓があまり出土しないことから製鉄遺構ではないように思われた。もし、これらに天井が架けられず、鍋などを架けるような構造なら、屋外の竈のような機能が考えられるかもしれない。このような土坑は、今まで県内では調査例がなく、ここではその機能性格について想像するにとどまった。これらの性格については類例の増加を待ちたい。

SK09から後期の無文粗製土器が出土し、ほぼ完形に復元することができる。この土器は偶然廃棄されたものとは考えられず、SK09に埋納したものであろう。ここでは縄文時代の遺構はこれのみで、なぜ単独でこのような遺構がつくられたのか疑問が残るところである。これと同時期と考えられる土器はわずかながら出土している（第24図1～6）が、原位置は保っていない。

森脇山城跡

阿丹谷辻堂跡



第1図 森脇山城跡 地形測量図 (1:1000)

1. 森脇山城跡

森脇山城跡は頬原町志津見522外に所在する。この城跡は神戸川を東に見下ろす東西に長い丘陵上に築かれている。ここは志津見盆地の南端にあたり、上流の八神方面からここに至ると視界が開ける場所で、中世にあっては要衝の地といえる。この丘陵の北西端は40m前後の幅で大きな切り通し状の崖になっており、城の防衛のうえで重要な役割を果たしていたのかもしれない。

この丘陵の最高所は南部にあり、その標高は326mである。この部分とここから西にかけて派生する丘陵上に城跡の関連遺構が予想されたため、約150m²発掘調査を行った。ここでは表土を10cmほど除去すると地山に達し、遺構および地山面の加工などはみられなかった。この結果、森脇山城跡はこの丘陵の東半部に限定できることがわかった。

森脇山城跡は測量調査によると、東西約70m、南北約9～14mを測る中規模の山城で、主郭と神戸川の比高差は約47mである。主郭は城跡東端から約45mの位置にあり、それを挟んで3つの郭が確認された。ここでは主郭を第1郭、主郭の東に隣接する郭を第2郭、さらにその東の郭を第3郭、主郭の西の郭を第4郭と呼ぶ。また堀切は3本確認された。東から第1、第2、第3堀切と呼ぶことにする。なお、調査時には雑木が密集していたため確認することはできなかったが、西および北斜面には等高線の乱れがあり、ここにも小郭がある可能性もある。

郭の規模は第1郭が東西11m、南北7m、第2郭が東西11m、南北12m、第3郭が東西20m、南北9m、第4郭が東西4m、南北9mである。

切岸の段差は第1郭—第2郭間がもっとも大きく、約2.5mである。この切岸は東側は明瞭で急斜面となっているが、西に向かうにしたがって次第に曖昧になり、傾斜も緩くなる。第1郭—第2郭間も急傾斜に作られ、両者の段差は約1.5mである。第2郭—第3郭間の切岸は他の切岸にくらべ傾斜が緩く、両者の段差も約1mと低い。

堀切の幅は第1堀切が約12m、第2堀切が約3m、第3堀切が約9mである。上面と底面の比高差は第1堀切が東で約6m、西で約1.3m、第2堀切が東で約1m、西で約0.6m、第3堀切が東で約2m、西で約3.5mである。

森脇山城跡の城主については同時代の記録がなく、その素性などについてはまったく知られていない。わずかに天保年間に記された『出雲稽古知今図説』に、「志津見村 森脇山城主森脇次部大輔勝正」の名がみえるだけである。「森脇次部大輔勝正」の名は『陰徳太平記』(1712)にもみえるが、これとても後世に作られたものであるため伝承の域をでない。

2. 阿丹谷辻堂跡

阿丹谷辻堂は頬原町大字志津見阿丹谷に所在する。ここには地元で通称「辻堂」と呼ばれる石塔が2カ所あり、現在に至るまで信仰されていた。これらは比較的大きな石を立てられており、石塔の記録と地下構造の確認を目的に調査を行った。

(1) 阿丹谷堂の原辻堂（第2～3図 図版172～173）

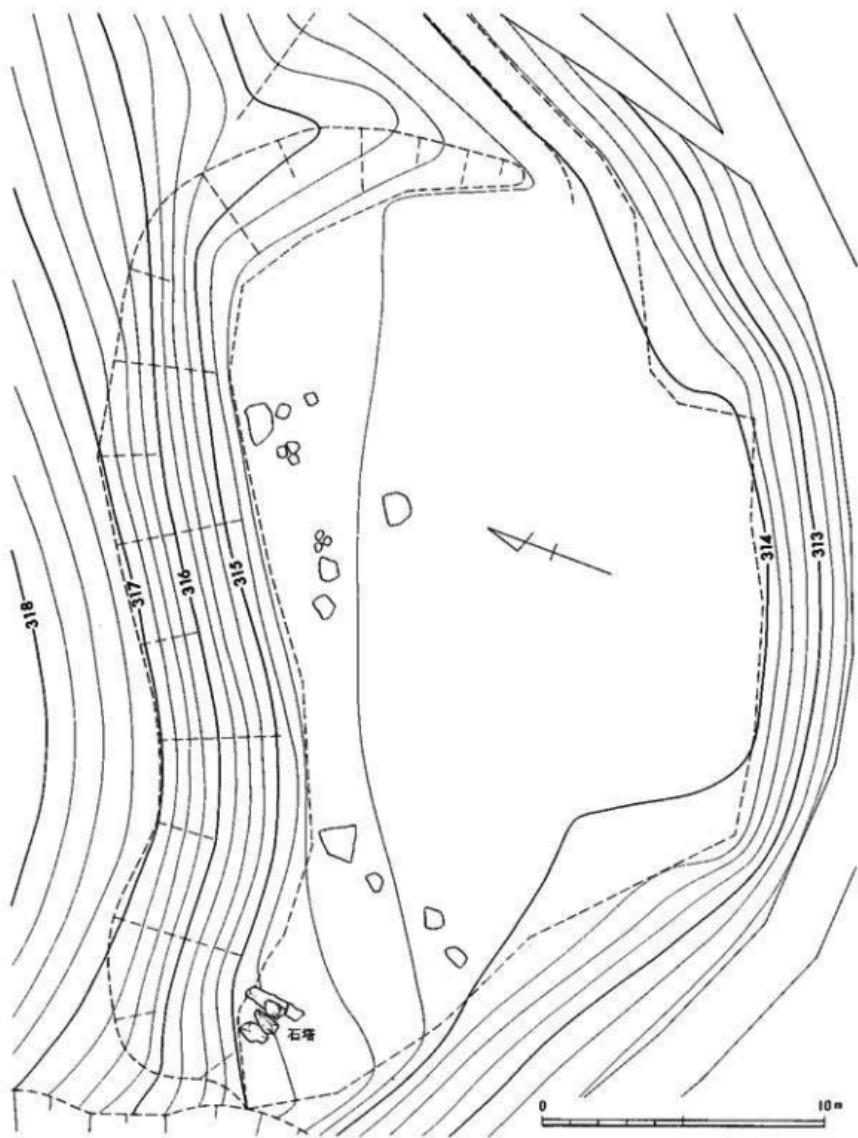
切り通しとなっている丘陵頂部に位置し、人工的な平坦面の西端部に石塔がある。ここには以前は御堂が建っていたという。測量調査の結果、この平坦面は南北8.8m、東西14mの広さで、丘陵頂部を南北11m、東西16.5mほど掘削して作られていることがわかった。底面は大部分が平坦であるが、西端部は南に向かって傾斜した幅の狭い加工段である。平坦面と丘陵地表面との比高差はもっとも比高差のある北側で約2.5mである。東壁の上面はやや盛り上がっており、掘削した残土の一部をこの部分に積んだものと推定された。北壁は中央やや西寄りでわずかながら広がり、底面もこの部分は傾斜している。

石塔は長さ50～80cmの長方形の石5個を基壇状に並べ、その上に長さ70cm、幅25cmの長方形の石を立てている（第3図 図版173）。これらの石はすべて自然石に近いもので、粗削り程度は行われたかもしれないが、加工度などは観察できなかった。これらは地表面に置かれただけで、地下に何の構造も認められなかった。

堂の原辻堂は、微地形の観察をすると東側3分の2と西端部分とでは大きな違いが認められる（第2図）。すなわち東側では底面がほぼ水平であるのに対し西端部では緩やかながら傾斜していることが指摘でき、これに対応するようにこの位置で北壁の方向が変化している。これらから推測すると、東西には2つの加工段があり、それが連結したものと考えることができる。伝承にある御堂はこの東側に建っていたと想像される。しかし、もともとの信仰の対象は西端部にある石塔であったと考えられ、この石塔を立てるために約4.5×6mの範囲で加工段を作り、それとは別に御堂を建設するために約12×11mの範囲で加工段を造成したと思われる。この2つが同時に造成、建設されたと考えることもできるが、それならもっと企画性がみられるはずであるから、少なくともこの2つの加工段は時期を遡れて建設されたと考える方が妥当であろう。遺物が出土していないため、それぞれの造成時期は不明であるが、信仰の対象が石塔であるなら、石塔の部分が最初に作られたと想像することができる。

(2) 森脇辻堂（第4図 図版174）

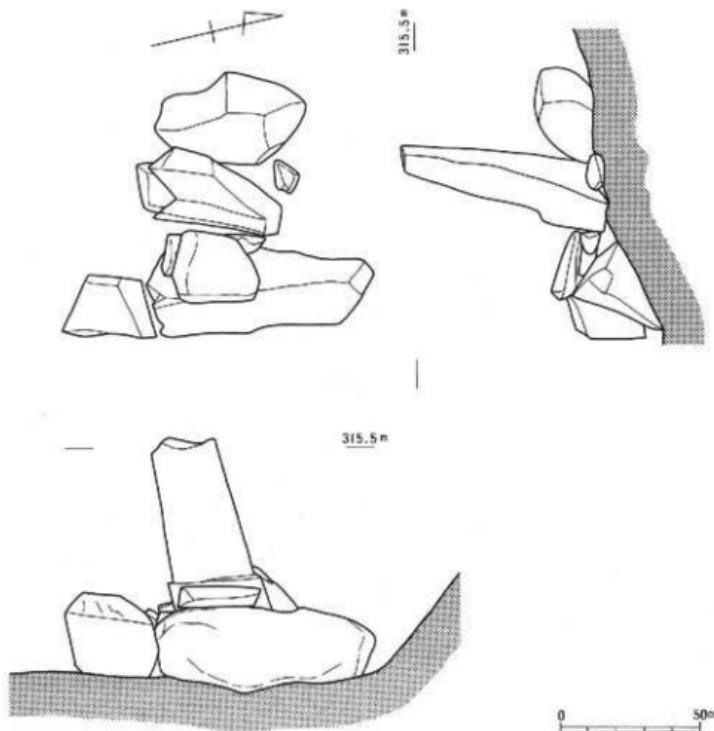
堂の原辻堂から、谷を挟んで約200m西方に位置し、堂の原辻堂と同じ道筋にある。地表面には



第2図 阿丹谷辻堂跡 地形測量図 (1 : 100)

30~80cmの石を基壇状に置き、その中心に長さ1.4m、幅30cm、厚さ10~20cmの長方形の石が立てられていた。調査時にはこの立石は立石に接して棒の木があり、これも信仰の対象になっていたようである。立石および棒の周囲には石が集められていたが、基本的には堂の原辻堂と変わらない構造である。これらの石は中心の立石が若干の加工がされているようだが加工痕は観察できず、自然石に近い。その他の石は自然石であった。

遺物が出土していないため、時期は不明である。



第3図 阿丹谷堂の原辻堂跡石塔（1:20）

これら通称「辻堂」とされる石塔は、現在まで地元住民に祀られている。その祀りの内容について、聞き取りができたので報告をしておく。

堂の原辻堂は、この地から飯石郡掛合町波多に移住した漆谷某氏の家が祖先の墓として長年祀っていたといわれる。調査後この石塔を移築し、現在でも祀っているという。

森脇辻堂は、ここに居住している藤原裕氏の家が、地蔵として祀っていたという。

2つとも石塔の形態はほぼ同じにもかかわらず、両者の祀りの内容が異なっていることから、本来の信仰の内容はすでに失われてしまっているのであろうか。

聞き取り調査には、田中勉亮氏の手をわざらわせた。

図 版

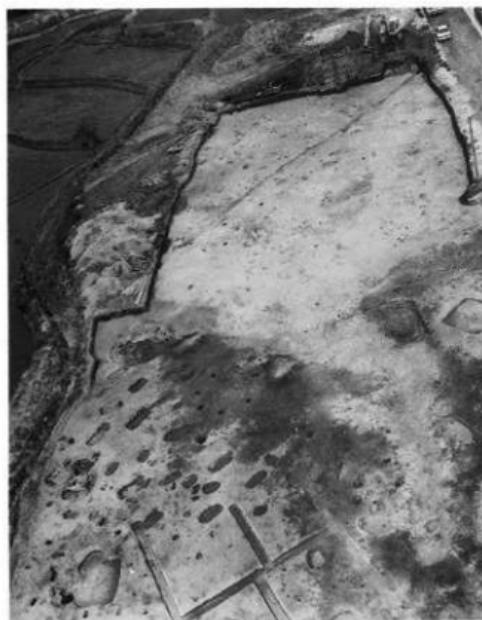




発掘前の風景



調査後の状況（調査区西部）



発掘後の状況
(調査区北部)



発掘後の状況
(調査区東南部)



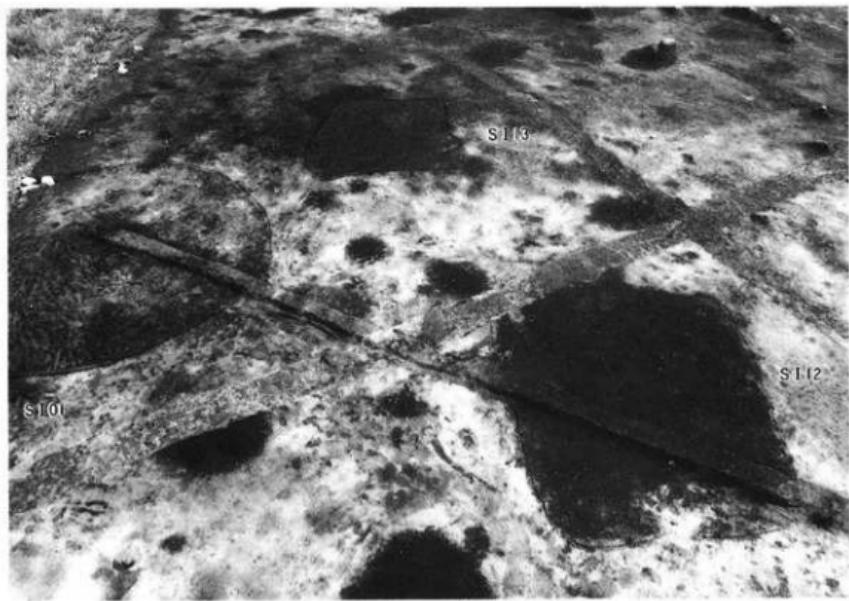
発掘後の状況（進入道路部分）



発掘後の状況（同西から）



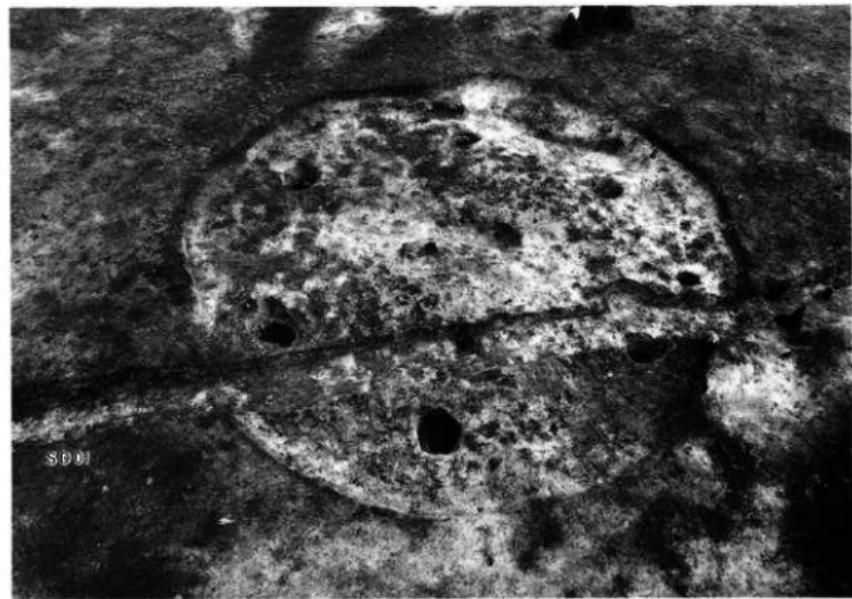
調査区東端部のピット群（西から）



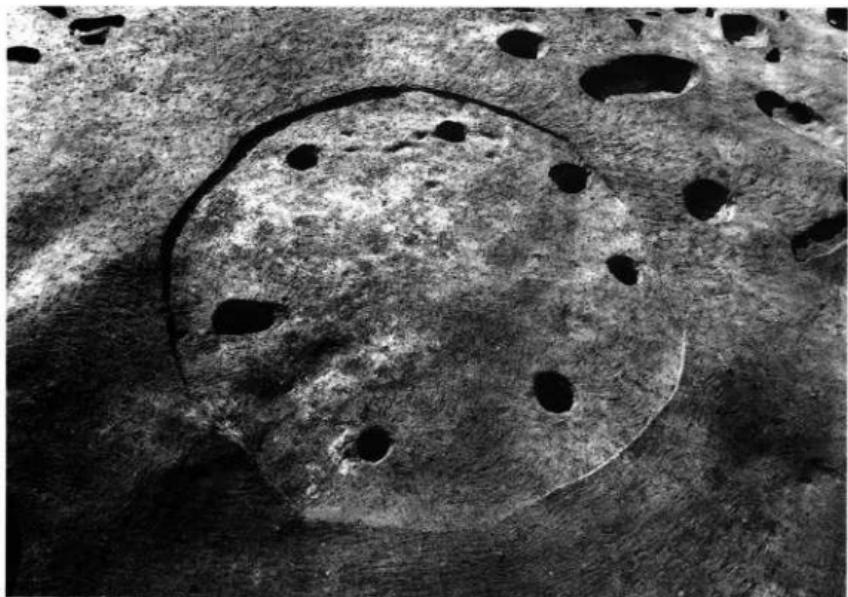
S1 01・12・13 検出状況



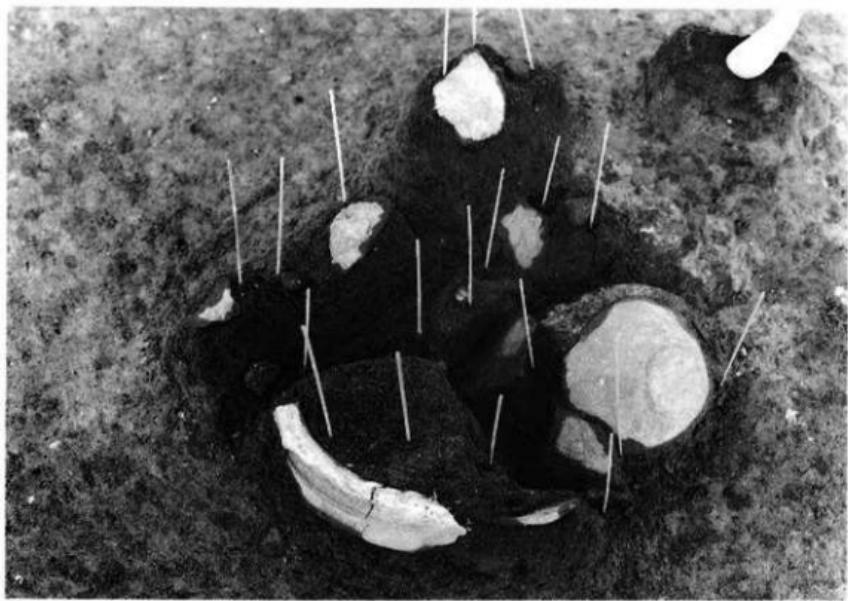
S101



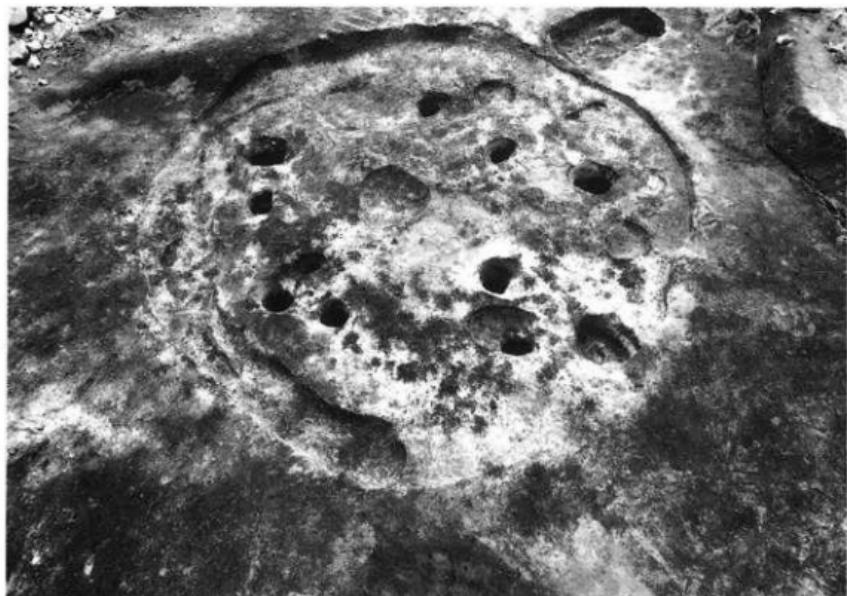
S102



SI03



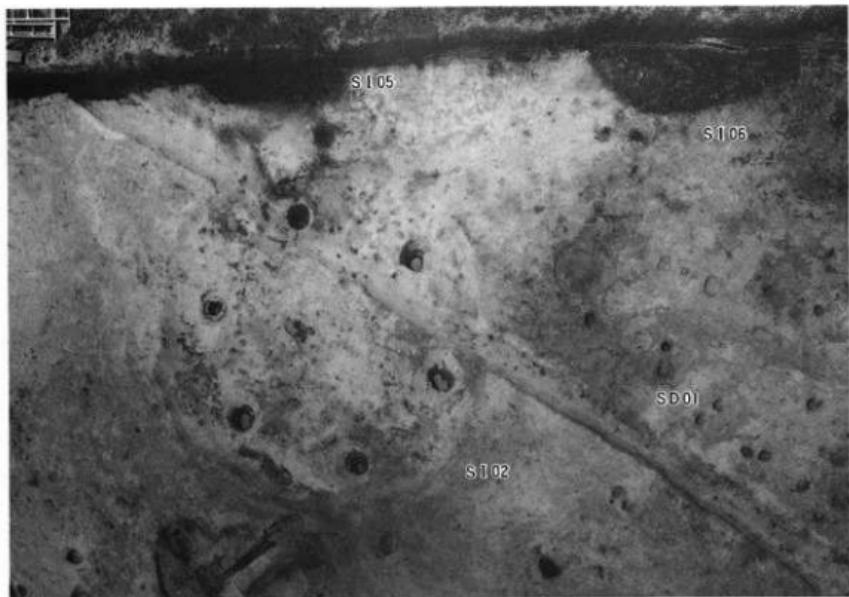
SI03 P 1 遺物出土状態



S104



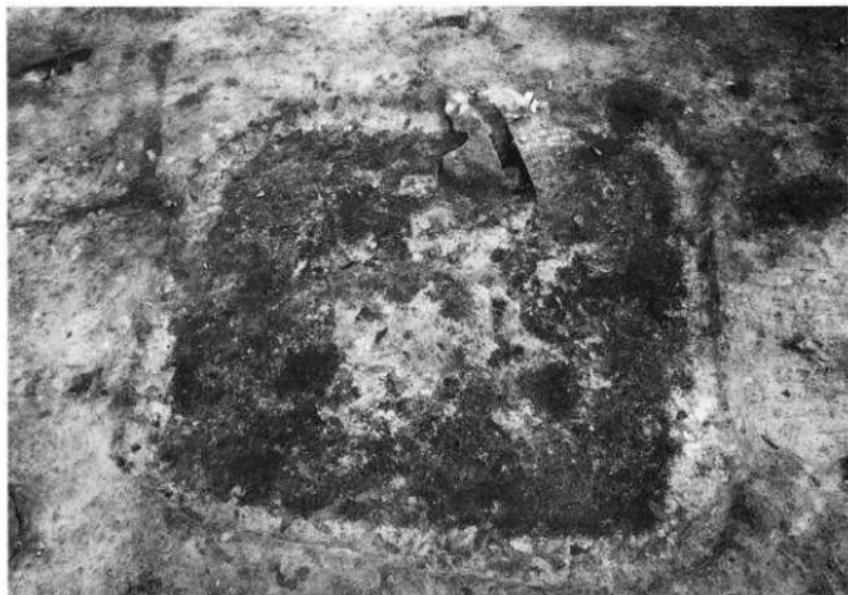
S104遺物出土状態



SI 05・06



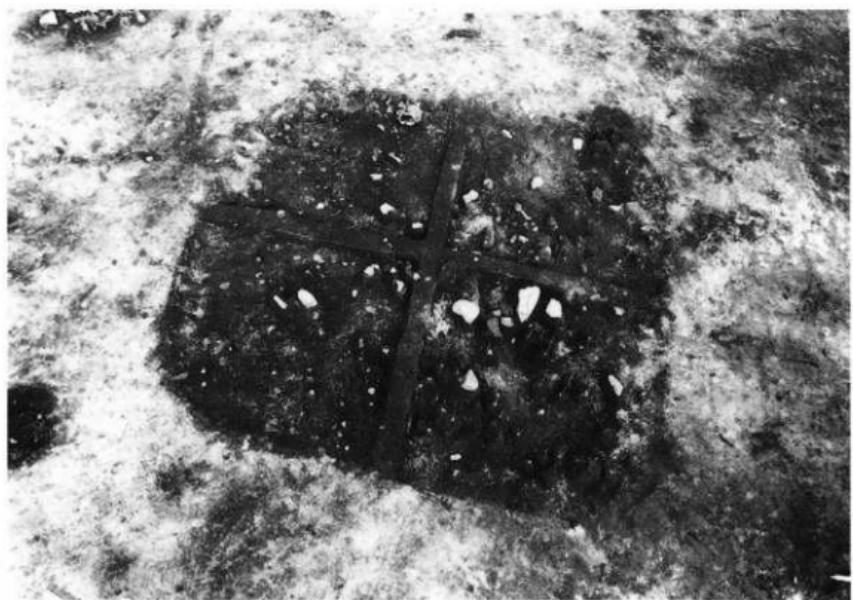
SI 07検出状況



SI 08 (貼床面の状況)



SI 08 (貼床除去後)



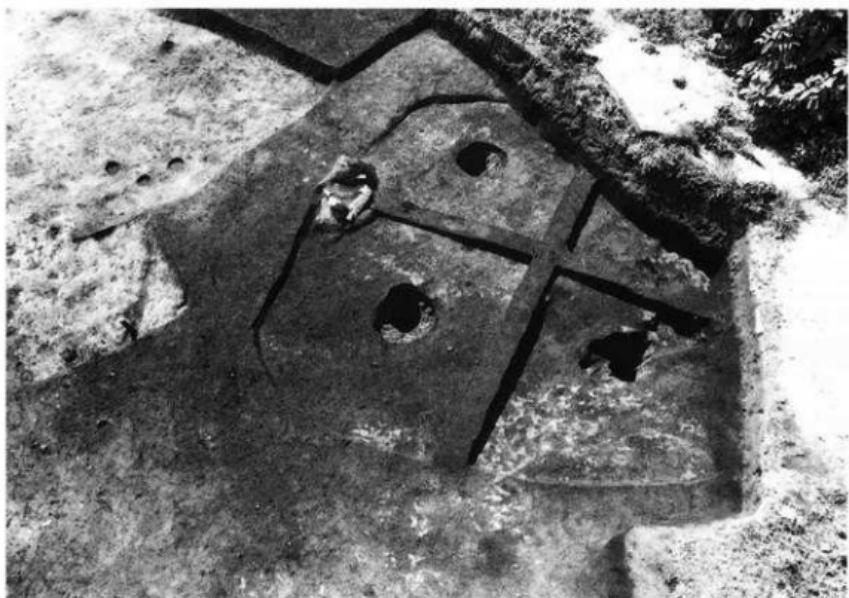
S I 08遺物出土状態



S I 08調査風景



S109 (貼床除去後)



S109 (貼床面の状況)



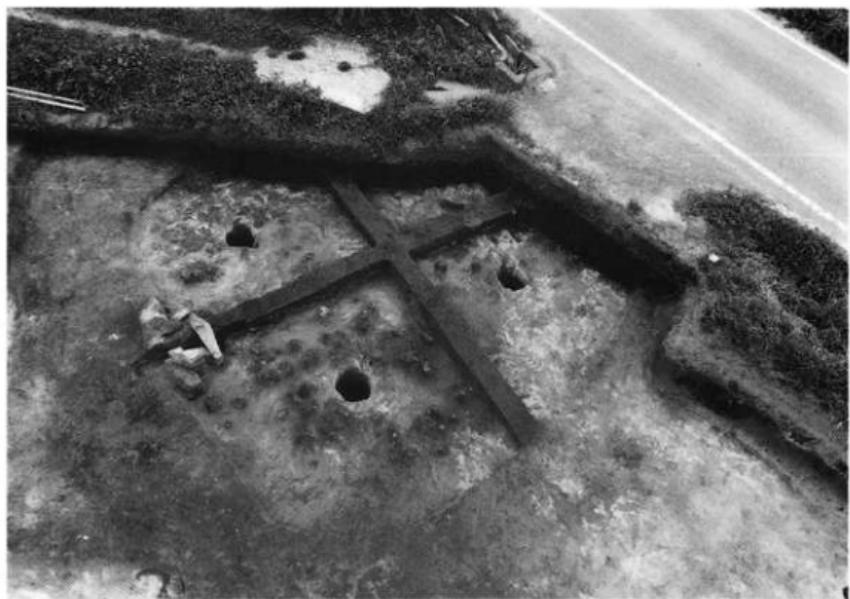
S I 09土層堆積状況



S I 09土層堆積状況



SI 09遺物出土状態



SI 09貼床除去後の遺物出土状態



S109電検出状況



S109電



SI 09電土層堆積状況



SI 10、11検出状況



S110（床面上は炭化物）



S110集石の状況



SI 10 P 3 石棟出状況



SI 10 土層堆積状況



SI 10竪石組



SI 10竪検出状況



SI 10窓土層堆積状況



SI 10遺物出土状態



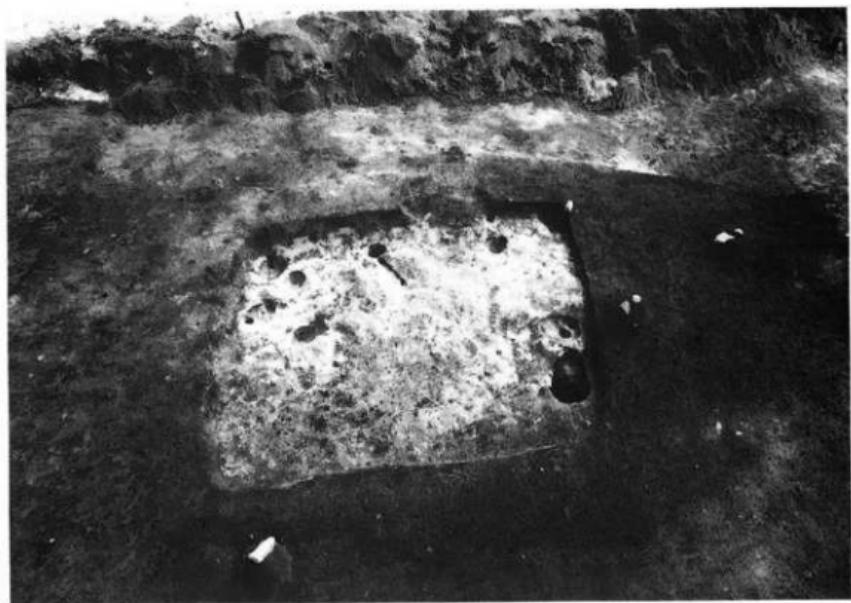
SI 10遺物出土状態



SI 10遺物出土状態（第41図 1～13）



SI 10遺物出土状態（第42図14～16）



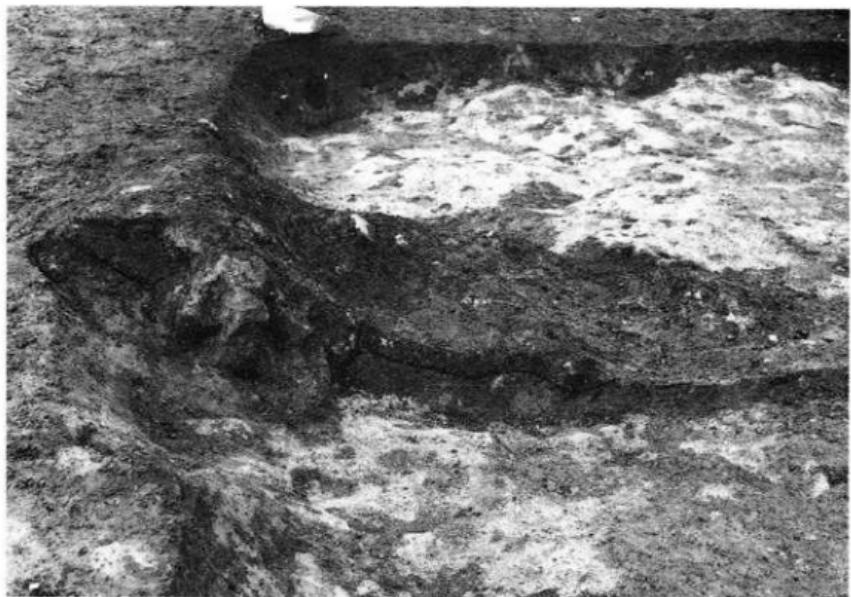
SI 11



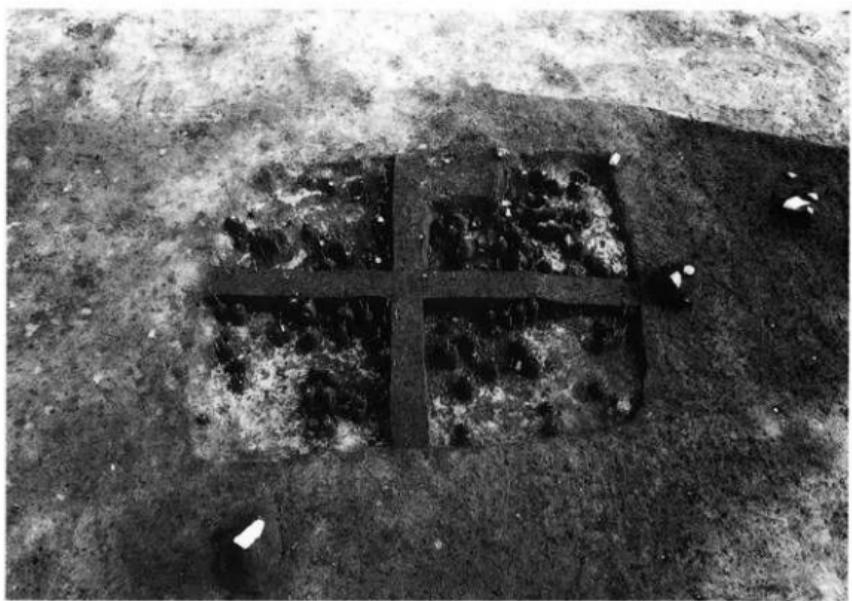
SI 11土層堆積状況



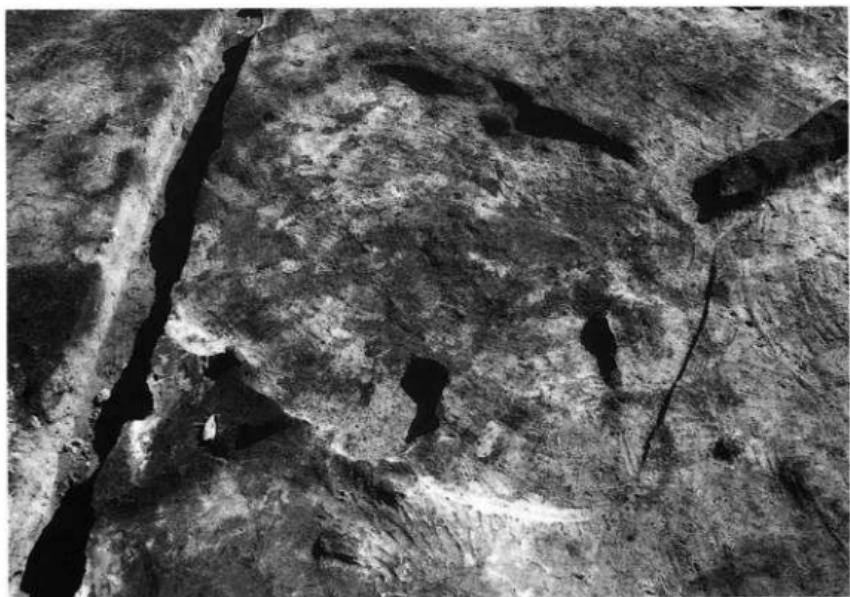
SI 11電検出状況



S11遺土層堆積狀況



S11遺物出土狀態



SI 12



SI 12 土層堆積状況



SI 12遺物出土状態



SI 13